

出藍文庫

11-1

志賀直哉生誕 140 年記念

東方白樺派合同

近藤 貴弥 編



出藍文庫



## 目次

こうず	正義とは理 <small>ことわり</small> の不在なり	.....	五
植物図鑑	私の紙	.....	一九
ひととせ	女苑の一瞥	.....	二七
藍もどき	金髪の小僧	.....	五三
改	流行感冒とこいし	.....	六七
深紅香奈	お目出たき娘	.....	八九
久我暁	白蓮の弟子たち	.....	一〇九
高坂流	城之崎にて	.....	一二九
近藤貴弥	善き道	.....	一四九
後書き	(近藤貴弥)	.....	一六六



こうず  
正義とは理ことわりの不在なり

千吉せんきちが物心ついた頃から、すでに兄の多聞丸たもんまるは「虎」を見ていた。虎という何者かが自分の元にはあり、どんな勝負にも勝たせてくれるのだと言って憚はばからなかつた。

父と碁を打って勝ったからとか、毎年五月の石合戦で彼が率いる組が必ず勝ったからという程度のものなら、子供らしい大言として未だ可愛げもあつたろう。「楠木様くすのきのご嫡男ちやくなんはまことに名将の器にて」と人々も冗談交じりに言い合つた。

けれども元服げんがくして正成まさしげと名乗り、楠木家の総領となつてからも兄は決して負けなかつた。鎌倉幕府の意向に従い、近隣諸国を荒らす悪党退治に出陣したのは元亨二年（一二三二年）の事であつたが、いずれ劣らぬ名うての戦上手いくさじょうずたちを正成はことごとく打ち破り、その年が暮れる頃には「河内かわちに楠木党あり、楠木党に正成あり」と、すっかり世人の褒めそやす弓取りになつていた。褒美を賜り楠木家の所領もぐんと増えた。しかし正成自身はあくまで「虎のおかげだ」と、誰に対しても微笑むばかりである。千吉はずつとそんな兄が好きだつたし、その清廉さこそいかなる名刀、具足ぐそくにも勝る宝なのだろうと思つてもいた。

## 7 正義とは理の不在なり

やがて千吉も元服して正季まさきと名乗り、兄に次いで弓矢を握った。

互いに年経ても兄弟の仲は変わらない。戦場で見事に手柄を立てた祝いとして兄は正季を自身の屋敷に招き、酒を振る舞ってくれた。

夜も更けて宴もたけなわという頃合い、酔いの回った正季は夢見心地に問いかけた。「兄上、虎とは何者なのですか」と。

兄弟の気安さから発した問いであった。が、正成は、酔いを寸時忘れたかのように威儀を正し「女じゃ」とぼつりと答える。

「女？ よもや、どこぞの遊女にでも懸想しておいでか」

「は、は。まさか。それでは俺の方が嫁御に首を取られるわい。その女と言うはな、正季。俺にとっては仏なのだ」

兄の言う意味が解らず、正季は困惑して首を傾げた。「疑っておるな」と、にやり、正成。「俺の兄が早くに死んだから——母上は、今度こそ丈夫な子を授け給えと寺に参って毘沙門天に祈りを捧げたという。虎は毘沙門天の使いであるによって、そのせいか。俺は幼い頃か

ら、戦になったら見た事もないはずの虎の気配を何となしに感ずる。するとな、たちまち知恵と力が湧き出ずる。そして、その虎とは女であるような気がするのだ。毘沙門天の装いをした、勇壮で、美しい女だ。それ以上は俺にも解らんのだが」

幼い頃の石合戦からして負け知らずの兄・正成である。彼の言う『虎』の正体が神仏の加護とすればなるほどと思えるものの、一方であまりに掴み所のない語り口はどこか腑に落ちない。いくら考えても結論が出ないのを、正季は酔いのせいだとごまかした。

兄が弟に『虎』の話をしてから、実に十年余りも経った元弘三年（一二三三年）。日本国の情勢が一気に塗り替わる大事件が勃発した。

かねてより政権の奪還を企てる時の帝と鎌倉幕府の間でくり広げられていた抗争が、この年五月、ついに帝の勝利で幕を閉じたのである。足利高氏、新田義貞、名和長年、結城親光など、名だたる諸将が幕府方から官方へと寝返ったのが勝因であったと言えるだろうが、その先陣を切って幕府の討伐軍を打ち破り皆を奮起させたのは、自身、かつては幕府に従って



## 9 正義とは理の不在なり

いた正成その人であったともいう。

帝が『元弘』の元号を『建武』に改め京の都で開始した新政の下、正成は従五位下の位を始め、河内国司や檢非違使など多くの官職も賜った。裏切りの罪で幕府に没収されていた土地よりも、はるかに多くの所領もだ。何もかも倒幕戦争で果たした多大なる貢献に対してのものである。楠木正成の人生の絶頂は、疑いもなくこの当時であつただろう。

しかし、いかに自らの武名が天下に轟いたところで、正成自身はやはり「虎のおかげだ」としか称さなかつたのだが。

——兄上は、もっと手柄を誇つて良いのだ。

正季は、他人が兄を褒めそやすほどにそう思うようになっていた。兄弟はすでに壮年であり、互いに新政での役職を賜っている。郷里にいた若き日の如く気安く顔を合わせるといふ事はすっかりなくなつたが、正季の兄への思いは募る一方だった。戦場での楠木正成の采配は子供の頃の石合戦から少しも衰えてはいない。否、天下の命運を決する大戦で勝つたのだから、年経てさらにその軍略は磨かれたのである。

変わった所と言え——と、正季は思う。兄は近ごろ、正義の話をよくするようになった。虎の加護を語りたがるのは以前と変わっていない。しかし同じ口で「虎はこの世に正義をもたらさんとしているのだ」とも言う。

ある朝、たまたま都大路みやこおほじで兄弟が轡くつわを並べる機会があり、正成からそのような話を聞いたのである。彼の言う通り虎が神仏の化身なら、確かに正義を行うというのは解る。解るが奇妙に引かかった。百里も離れた敵軍の動向すら見破る正成の慧眼けいがんは鞍上あんじょうにいたずらに揺れるばかりで、すぐ横で弟が訝いぶかしんでいるのにも気づかない。そんな彼がなお熱を込めて「この歳になつて自分の使命をようやく自覚した」と言う。

「正季、俺は、俺を見出してくれた帝のためにこの命を捧げる。かねての大戦は帝からのご期待に沿うべくほとんどがむしゃらに戦っていた。しかし今は違うのだ。これからは、天下の政道を守るために張り切つて弓矢を執るぞ。それが虎の望む正義であるに違いない」

都に出てから人に教えてもらった非理法ひりほう権天けんてんという言葉を、正季は思う。非道は道理に勝てず、道理は法を超えることなく、法は権勢に屈し、しかし権勢もまた天意を仰がずにはい

## 11 正義とは理の不在なり

られないという。兄は相変わらず私欲なく清廉に過ぎ、そして今は天に目を向けている。それが彼を正義の体現者に変え、人間離れさせていくのであるか。正季はふと、そんな風に思った。

「正季。虎はもう、来ておらん」

寂しげな微笑に乗せ、正成はほつり、眩いた。

彼の顔には砂と汗、それに血の混じった赤黒い汚れがあちこちに貼りついている。それは正季とて同じであつたろう。この場に集つた楠木党の手勢・七十余名とも。みな疲れきり、傷を負つた者たちも一人や二人では利かない。惨めな姿を詰め込んだあばら家は、いつ敵方に見つかつてもおかしくなかつた。

「そうか。そうなのか」

正季の笑みは安堵の気持ちを含んでいたが、兄の目には慰めに見えたらしい。互いに座り込んだ兄弟が心から笑いあえたのは、少年の頃以来ではなかつただろうか。

「まさか我らが破れるとは……」

誰かが発する悔しげな声と、さらに絶え間ない苦悶のうめきが混じり合う。そこに大将である正成を責める色はなかった。ただ不思議に思う心だけだと正季は感じる。

倒幕の同志だった足利——『高氏』改め——尊氏そむが叛いて以来、楠木党はこれを諸将と共に討伐して九州へと追いやった。建武三年（一三三六年）始めの事である。が、尊氏はわずか数か月で体勢を立て直すと都へ向けて猛烈な勢いで攻め上りつつあった。いつしか形成は完全に逆転していた。今度の戦場である湊川みなとがわでは、正成と共に尊氏討伐を命ぜられた新田義貞が不利を悟って早々に兵を退き、残った楠木党は激戦の末に敗北したのである。旧暦五月——現代の暦では七月に当たる昼下がりの暑さは、戦場の血生臭さを否がが応にも高めていた。

「兄上。虎はどこに行ったか」

そう兄に問うて得られた答えも、先の通りにおほつかないものである。

「我らは間違っていたのですか。帝のための正しい戦ではなかったのですか」

兵らの苦悶は、やがて別の問いへと変わっていく。手足のまだ動く者たちが数名、床を這っ

### 13 正義とは理の不在なり

て正成にすがりつく。正成は彼らを振りほどかない。ただ、俯いて答えるのみだ。

「否よ。間違っていたから敗れるのではない、正しいからだ。正義だから敗れるのだ。足利勢はこの戦いに勝った。しかし帝に弓を引いた以上、未来永劫に渡つて逆賊の誇りそしは免れぬ。我らは正義に殉じて死ぬ。それが虚しくあつてたまるものか」

せめても意気を鼓舞されて、兵らは胸をなで下ろす。死にゆく者たちにとって最も心残りなのは、無駄死にかどうかという点ばかりだ。それは正季とて同じである。激戦ですでに刀折れ、矢は尽きた。そもそもからして敵味方で兵の数が違いすぎた。元が田舎侍の正季に政道の機微は解らぬ。解らぬなりに察してもいた。建武の新政がその放漫な統治によって世の中を混乱させ、人心を失いつつあるというのは。だからこそ諸国の武士はこぞつて尊氏に味方し、反対に官方には兵が集まらなかつたのだと。

「虎は、もうおらんのですか」

正季はまた訊ねた。正成は首を横に振る。

「最初から見えてはいなかつたのだ、この戦いでは。なぜかは解らぬ。神仏のお考えを人の

手で地上に顕あつわさんとするのが、そもそも傲慢であったのかもしれない。それでも、今も虎はどこかにいるような気がする。今生こんじょうでは会えぬかもしれぬ。あるいは来世での話かもしれぬ。その先でなお俺に勝利を与えてくれるような気がしてならぬのだ」

「兄上、それは……」

もはや物狂いではないか、と、正季は口に出しかける。あるいは、虎とは神仏に化した物の怪ではなかったか。その加護を受けてきた末路が今の惨状というなら、虎は最初から兄を破滅させるために憑よっていたのではないか。

頭の中に巡る疑念に、答えが与えられる余地はなかった。否、正季自身が求めてなどいなかった。ここに至つてまで、兄は自身の名誉を求めない。虎の加護を信ずる清廉な少年のままでいた。あまりにそうでありすぎた。

ならば、自分にとつての正義とは何であろう。唯一残された武器である脇差の柄を握り、正季は考える。戦傷の痛みが考えを明晰にさせていった。

「兄上。俺も同じ思ひだ。七度死んでも人間に生まれ変わり、共に逆賊を討ち滅ぼそうでは

ないか」

最後の言葉が本心なのかどうか、もはや正季自身にもどうでも良かった。ただ少年時代を思い出させる、爽やかで澄み切った覚悟だけがそこにある。「いざ、さらば……！」。楠木兄弟は同時に脇差を抜いて向かい合い、互いに相手の首へその切っ先を突き立てた。鮮血が逆り、兄弟は床に倒れ込む。同じように自害した将兵の骸が、あばら家の中に折り重なっている。……。

正季は、不思議なものを見た。

誰もみな血の海に沈んで息絶える寸前という中に、突然、何者かが闖入り込んできたからだ。誰か……と叫ぼうにも彼の喉からはか細い息が漏れ出るばかりで、問うなどはもはやできなかつた。それでも彼は目玉を震わし、突然の闖入者を見た。次第にはやけていく視界の中では刺し違えた兄の顔すら朧気だったが、闖入者の姿だけははっきりと見えたのである。

それは、一人の女だった。唐からのそれを思わず装束を身に着けた、黄金色の髪の毛をした背

の高い女だ。虎だ——と、正季は考える。本物の虎など知らないのに、何より初めて見る人物なのに、目の前の女が虎であると、兄がしきりに語っていた神仏の使いであると、なぜか、そう解る。

女は辺りを歩き回り、もう動かなくなった正成の傍らに膝を折った。そして肩を掴んで揺り動かすと、何かを悟ったように、最期の瞬間に見開かれたままになっていた彼の両眼を閉じてやった。慈しみに満ちた美しい顔と、優しい手つきをしていた。しかし一方で、その瞳には凄まじいまでの狂気が燃え盛っているようにも感じる。身震いするほどの体力も残っていない中で、正季の脳裏にこれとよく似たものが駆け抜けていく。

ああ、そうだ。これは、他の女に色目を使う男にどうしようもなく妬いてしまう妻妾さいしやうの目ではなかったか。では、虎は何に怒っている。楠木正成がここで果ててしまう事にか。十分な手柄を立てずに終わった事だろうか。

正季にはいずれも正しいと思われなかった。もしかしたら、兄弟揃って何かを間違えていたのかもしれない。虎は正義の化身ではなく、ましてや悪の化身でもない。彼女はひたすら



## 17 正義とは理の不在なり

に戦いを求め勝利のみ与える神々しき獣でしかないのではないか。人界に何かを打ち立てんと志を抱く事そのものが、不信心者の行いだつたのではないか。

すべては正季の憶測に過ぎぬ。答えの代わりに見えたのは、虎が正成の亡骸に喰らいつき、牙を立てる光景であつた。未だ温かいままの正成の血潮と、女の流した涙が混じり合い、彼女の着物を濡らしていた。

その姿を前に、とうとう正季は、兄について数年来抱いていた一切の不安から解放されるような気がした。彼の薄れゆく意識の底に、女が兄の骨肉を噛み砕き飲み込む音はもう聞こえない。

いつしか、足利勢から追手として放たれた軍兵があばら家に近づく気配が、かすかに響き始めていた。〔了〕



植物図鑑

私の紙

ある日のこと。私が外来本を読んでいるときのことだ。私はふと色々なことを考えてしまった。

読んでいた本はとても古い、それこそ文字も墨で書かれているような本だった。私がこのような本を読むことはそれほど珍しいことでもないし難しいことでもない。私の能力をもってすればいかなる文字であろうとすらすらと頭に入ってくる。それは非常に便利な能力ではある。でも、私は時たま思うのだ。私は本当に読む楽しみを享受しているのだろうか。そもそもこうやって頁を繰ること、そして文字を頭に入れていくこと、それが本当に読む楽しみに繋がっているのだろうか。私はときにそういうことを思うのだ。例えばだ、外の世界では電子書籍、と呼ばれる、電子機器の画面に表示される本の形態があるらしい。この間董子さんにも見せてもらったけれど、あれとこうやって紙の上に文字が書かれた本とでは何が異なるのだろうか。なるほど、たしかに董子さんに触らせてもらったあの機械の画面に表示されている「本」は大したものである。ものによっては頁を開く動きすら模倣している。ただ、私は思うのだ。この幻想郷で電子機器が普及し、電子書籍によって天狗の新聞やら幻想郷縁起

なんかが配信されるようになったとしても、私は依然として紙の本を愛するだろう。

そう思うのは私が紙の手触りを愛する、旧態依然とした、いや、幻想郷ではそうではないけれども、そういう人間だからだ。確かに電子媒体の画面上に表示されたテキストは文字の間隔であるとか文字の形であるとか、そういうものは美しく設計されている。しかし、結局のところそれは朽ちることがないのである。

私はあまりそういう電子データとかには詳しくはないけれども、実際の紙との大きな違いは結局朽ち果てるかどうかなのではないだろうか。確かに紙の匂いだとか開く手触りだとか、そういう違いを言い出したら切りはない。でも私は、いつかは朽ち果てる、幾十年ほどあとだろう、そんな不完全さを愛してしまうのである。それはきつと私が妖怪ではなく人間だからなのかもしれない。電子データで構成された本は汚すこともできないし、破くこともできないし、なんなら食することもできやしない。私は紙というものは朽ち果てるという点において電子のデータ上に記された「本」に対し勝っていると思わざるを得ないのだ。

さて、朽ち果てる、という点については我が鈴奈庵に入ってくる本は優等生揃いだ。なに

せ外の世界では忘れ去られたりした本なども入ってくる。自然そういう本は一時期は手垢に塗れたものの、それからは誰も開く人がいなくなり、結局茶色く黄色く変色していたりしたりと散々なものである。特に洋紙はそういう具合が顕著だ。大正昭和期の本なんて手袋でもつけて扱わないと、大切な品物だというのについっかかり破いてしまいそうである。たまにそういうもののなかにも稀覯本と呼ばれる本があるのだけれども、そういうときは目の玉が飛び出るような高い値段をつけておき、妖怪の賢者であるとか命蓮寺の住職様であるとかそういう方々に借りてもらおうようにしているのである。

しかしである、そういう本の困るところは手で扱えない、ということである。先程手袋をつける、なんて話をしたがこれは全く誇張でもなんでもない。本当に手袋をつけ、慎重に扱うのである。まあ確かに頁を開くたびに歴史を感じさせる匂いなんかは漂ってくるのでそれはそれで楽しむことはできる。しかし私の好きな紙の手触りの楽しみなんかは大きく減衰してしまうところである。いくら紙が朽ち果てやすく、私とその性質を愛する、とはいえこれはこれで困ることなのだ。

私は今、和紙でできた江戸期の本を読んでいる。和紙、とは不思議なものである。工業化の産物ともいえる洋紙と比べると、和紙、というのは実に古臭いもののように思える。ところが和紙は洋紙に比べると格段に朽ち果てにくい。もちろん物である以上、いつかはたしかに朽ち果てるのである。でもまるで時を止められたかのように、その進度は随分とのろのろしている。いつになつたら朽ち果ててくれるのだろうか。おそらくは千年の後もこの姿を留めているのだろうか。

私は和紙の手触りが大好きだ。それこそ洋紙のそれよりもはるかに。和紙はどこどころ凹凸がある。それは原材料であるとか、そういう自然の産物が表にできたものであると共に、一枚一枚手で漉かれたことよってできる個性であつたりする。ときに思うのだ。お前はこうやって本にされて本当に幸せだったのだろうかね、と。美しい紙、私が読んでいる本の紙もそういうものであるけれども、そんなものは墨で汚れることが本当に幸せなのだろうか。私にはついにわからない。紙、というのは何者かにその表面を汚されなければ用をなさない。そうでなければちり紙にでもしたり薪と一緒にくべたりと、無惨な死を遂げるこ

とになる。こうやって表に墨汁でとりとめもないことを書かれた結果、こうやって数百年も生きることとなり、今このようにして現前しているのである。

この和紙はどのようにして作られたのだろうか。幻想郷でももう和紙を作っている人なんて数少ない。それこそ一人二人ぐらいだろう。幻想郷にも文明化の波が押し寄せてきた結果、和紙は洋紙に取って代わった。私はそれが悪いことだとは思わない。それでも、私はそこに一抹の寂しさのようなものを抱かずにはいられないのだ。冬場には紙を漉くために水に手を入れると千切れるような冷たさを感じる。それでも彼らは紙を漉く。そうやってしか作ることのできないものがそこにはあるからだ。それは自然との対峙であり、自然との対話でもあり、自然との共同作業でもある。私は紙を漉く、ということはしたことがない。でも、そうやって自然と人が共に命を分かち合った結晶を今、私は指先で感じている、味わっている。幻想郷縁起は未だに和紙に書かれているのだ。

紙はどうかれば幸せなのかなんてわからないし、ましてその原料となった楮であるとか雁皮であるとかの幸せなんてますますわかりっこない。そもそもただの人間である私なんか



その背後にある自然の恵みに勝手に思いを馳せて、その幸せを推し量ってみる、ということ自体が十分にふてぶてしいことのように思える。それでも私はこうやって、数百年前、誰かが摘み取り、砕き、手で漉いてくれた、そしてその産物であるこの愛しい紙に対して、私のところに来てくれてありがとう、と言ってあげたいのだ。〈了〉



ひととせ

女苑の一瞥

依神女苑が、賭場で大負けを果たした。

内容は西洋式馬比べ——『外の世界』風に言えば競馬である。四月の桜が爛漫と咲き誇る頃、牝馬ひんばを中心として幾つかの農耕馬が集まり、競走をさせる。その一等を予想して金を賭けるといふものであった。が、女苑が失敗した。

それは良い。賭博なんていうのは当たり外れがあるものだ。だが、今、女苑が外したのは最終レースであり、かつ、財布の一番底にいた僅かな硬貨である。手持ちの宝石などはあるが、ここに人里から離れた場所であり、質屋などはない。どの道、最終レースは終了した。とどのつまり、素寒貧になった。

春に混じる、少し寒い風がやけに骨身に沁みる。

えいやつ、と蹴り飛ばした小石の転がった先には、女苑には見慣れない集団がいた。

数頭の馬と、同じだけの人間——走った馬と、その飼い主である。

加えて女苑が見たのは、その内の一人が、金子の入った袋を受け取った事だ。競馬は走らせる側も金を持ち寄って、その順位に応じた賞金を獲得する。今回は一位の総取りであるら

しい。女苑がそれに目をつけた。

飼い主の帰り際、女苑は声をかけた。

「すみません。少し、良いですか？」

飼い主——頭髮が僅かに薄くなつてくる年齢の男だ。日頃の労働では隠しきれなくなった腹部が、前に出てきている。そんな中年太りの男は、声をかけてきた女苑を訝しんだ。

「お馬さん、すごく足速いんですねー。いつも、どうやってらっしゃるんですかー？」

男はより深く怪訝な表情を作ったが、今は機嫌が良い。「飲みに行く程度ならば、まあ良いか」と。気軽に承諾した。

男の名前は甚野じんのさんざえもん山左衛門という名前であった。

幻想郷が閉ざされる前からの農家をしている旧家であり、代々、農業を営んできた家だ。小作人を数人抱えながら、家主自身も農作業に従事する家である。山左衛門はそんな家の、三男として生まれた。

甚野の家は古い家だ。三男である山左衛門は家を継承する為の『予備』として生まれ、『婿

取りをする家への交渉材料』として育ってきた。加えて、読み書きソロバンは人並みであり、どちらかといえば肉体労働の方が向いていた。

故に、甚野 山左衛門は——衣食住はある程度確保されつつも——成長するにつれて納戸での生活を送る事を余儀なくされた。小さな通気孔を窓とする息苦しい生活は、山左衛門の気性にも影響を及ぼし、陰気さを根深く持つ気性を生んだ。

そんな彼にも人生の転機があった。

長男は知人の獵師と一緒に狩りに出た時に、崖から足を滑らせて転落死。次男は妖怪の神隠しに会って行方不明。

こうして、三男である山左衛門が家督を相続する運びとなった。

だが、時既に遅し。

歳も三十五を超え、甚野の家はそこまで大きな家ではない。新しい嫁の貰い手に苦しんでいた。加えて、今は亡き長男には遺児として娘がいる。山左衛門は、今でこそ家督相続人として大きな顔をしているが、このまま嫁が来なければ、婿取りが始まり、再び納戸での生活

が始まるであろう。迫り来る「その時」に怯えて、日々の仕事に従事していた。

そんな中で出てきたのが今回の競馬であり、報奨金であった。いつもは人間不信染みた思考を持つ彼であったが、今日ばかりは、と女苑と酒の席を囲んだ。

その時間を女苑は、

「さすがですねー」

「知らなかったー」

「すごい」

「誠実な人なんですなねー」

「尊敬します」

の五つだけで乗り切ったという。

月が中天にかかる頃、二人は居酒屋を出て、流れるように安宿に入った。熱い夜を過ごした後、二人は付き合う仲となった。

「はい、こんにちはい」

数日後、女苑が山左衛門の家を訪れた。甚野の家族は怪訝な表情で女苑を出迎える。婚前交渉に至った不徳の女だ。そのような視線を十二分に込めての出迎えである。一方で、彼ら自身、上手くないかない嫁探しの最中に現れた若い女の存在は僥倖であった。故に、深く文句を言わなかった。

「じゃ、行きましょうか」

女苑の、媚びるような猫なで声が山左衛門の心をくすぐる。

山左衛門にしてみれば、初めての『でえと』という事になる。一張羅とまではいかないまでも、相応に見栄えを良くして家を出た。ただ、女苑の心情としては、そうでもない。

(ダサイなあ)

一言で切り捨てる所を、咄嗟の判断で口をつぐんだ。

無論、目が肥えている女苑である。山左衛門の服装の、その生地や装飾などから相応の値段がかかっている事は値踏みがついている。だが、山左衛門の長い納戸生活が、その服を活



かす技術を体得させてこなかった。

(……いつ切り捨てようかな)

女苑は——女苑の胸の内に燃える欲望と疫病神としての性質は、山左衛門なる男の、ふがない甲斐性を許しはしなかった。

豪華な衣服に身を包み、群がってきた程度の低い女を周囲に侍らせ、高級な車を乗りこなし、ありとあらゆる誹謗と称賛を浴び、著名な絵師の作品と風光明媚な景色を眺めながら、幻想郷中の珍味と高級酒でもつてのみ生活をする。

それこそが自分にとってふさわしいと思っていたし、その為ならば、ありとあらゆる物を利用して決めていた。

それは、自らの肉体すらも含める。

事実、女苑は山左衛門の報奨金を目当てに一夜を共にした。そこに後悔はない。今の女苑が最も問題視しているのは『山左衛門の家に大した金がない』という事実だ。

そうなれば、女苑としては山左衛門と付き合うに値しない男である。

故に女苑は、早々に見切りをつけた。

その日は一軒、二軒ほどの喫茶店に行つて軽食をして終えた。

後日の事である。

女苑は夜の繁華街で一献、傾けていた。まだ宵の口である。山左衛門から『拝借』した金を元手に、少し速い晩酌を楽しんでいた。キュウリの浅漬けが小気味良い音と齒ごたえ、それに少しの塩味が口中に広がる。おいしい。

そんな中で、何人かの団体客が入ってきた。

「今日は私の奢りだから、遠慮するな」

そう言いながら入ってきた男は、幾つかの指輪をはめていた。着ている服の生地も良い。山左衛門より「イイ男」である事は明白であった。女苑の目が鋭く光る。

運良く、男が近くの席に座った。男の話に女苑が聞き耳を立てる。

「良いか？ 宝石で金を稼ぎたいのなら、『目』を鍛えるんだ。目利きのできない奴は、良い

「商売ができない」

男の名は支倉行成はせくらゆきなり。

幼少より宝石商をしている父について回って宝石の鑑定眼を鍛えたのだという。かつては父と一緒に谷へ向かい水晶や翡翠、黒曜石を取っていたのだとか。商売仲間への顔出しも盛んに行つて覚えもよく、めでたく跡取りとしての修行を始めた。

始めは拡大鏡の焦点合わせも辛かったが、それもじきに慣れた。問題は、一度得た顧客を逃がさない、という点であった。不景気によつて顧客が離れてしまえば、二度と帰つて来ない。そういう危惧が行成の心中にあったのは確かだ。

一方で、行成には一つ、才能があつた。

宝石に魔力を蓄える能力がある事を、行成は理解した。

魔力を蓄える事のできる一部の宝石を『特定層』に売りつける事で、固定客にした。以降、行成の宝石店は安定した。今では従業員も増え、二店舗をさあどうしようかと考えている最中なのだとか。

行成が店を出て方々に散った時、女苑が声をかけた。

「はじめまして」

山左衛門にやったのと同じ方法で、女苑は行成に取り入ったのは、言うまでもない。

さて、行成に取り入った女苑は、妾という立場となった。新しい女を手に入れた行成は、女苑に入り浸るようになった。金でつながった関係だというのは、行成も女苑も了解している。  
(どうしようかな……)

少し格式の高いイタリア料理を待ちながら、女苑はそんな事を考えていた。行成の歳は山左衛門とそう変わらない。妻がいれば子もいる立場だ。行成の歳は山左衛門とそう変わらない。妻がいれば子もいる立場だ。

則ち、行成が女苑に飽きれば捨てられる立場だという意味である。

「おいしいかい？」

「ええ。素敵なお店を紹介していただきありがとうございます」

トマトとチーズのサラダ——カプレーゼが運ばれてくる。一口食べると、サッパリとしたチーズにトマトのジューシー部分がからみつく。おいしい。さらに年代物のワインを一口。

香りが鼻を抜けて心を満たしていく。

「ごちそうさまでした」

「良いってことよ」

「あの……二軒目は……その……別の場所で……」

女苑と行成の二人は、人力車を呼んで、そのまま出合茶屋へと消えて行った。

そして、熱い時間が流れる。

情痕激しい行成の背中が、行灯の光に照らされて赤く滲んでいるのが見える。行灯の火を借りて紙巻きタバコに火を点けると、行成が紫煙を一条、ゆっくりと吐き出した。

「あ、私も」

女苑も同じように、紙巻きタバコを取り出してくわえた。

ん、と突き出す。

行成も顔を近づけて、紙巻きタバコの先端と先端を押しつけあった。二人の顔と顔の間に、

赤い火がひときわ明るく灯る。

(まっず……)

紫煙を吐いた女苑がそんな事を思っていると、行成は何やら、いそいそと服を着ている。女苑が怪訝な顔をして見守っていると、行成はそのまま袖から白い包みを取り出した。

小判二十五両を梱包した包み金——通称、切り餅。

今や小判というのは主流ではないものの、その価値が下がるという事はない。

「これは？」

「手切れ金だ」

「……え？」

「そろそろ嫁が気づき始めた。『アレ』は嫉妬深くてな。以前、刃傷沙汰になりかけた。お互い、そうなるのはイヤだろう？ ここらが潮時だ」

——この支払いは済ませておく。

そう言った行成は、女苑の返事を待たずに行成は出合茶屋を後にした。

ここで女苑を襲ったのは、耐えがたい屈辱感であった。

男を踏み台にして身一つで立身出世を企てる女苑にとって、男に遊ばれるというのは侮辱に等しい。あまつさえ、高級料理に舌鼓を打ち、移動は人力車に任せ、体を重ね合ったあの時間を『切り餅』に換金する。

もはや侮辱を通り越して、尊厳に対する凌辱であった。

(この野郎……!!)

刃傷沙汰、大いに結構。

行成などという小金持ちの中年男性など捨てるほどいるが、この屈辱感は相応にして返さねばなるまい。

女苑はそのように考えた。

だが同時に、彼女の内にある冷静な部分が語りかけてくる。

——金が手に入ったから良いではないか。

——どうせいつかは手を切る相手だったのだ。

女苑が持つ屈辱感の根幹は、相手に主導権がある、という一点から発展した事である。それらを手放してしまえば、切り餅一つ丸儲けというものだ。

渋面色濃い女苑は、

(次に会ったら覚えてろ)

という固い決意を胸に、そのまま眠りについた。

それから、数週間が経った。

三日月が微笑みかける夜、女苑はバーのカウンターで酒を飲んでいた。ウイスキーに染み渡った樽の香りが気持ちいい。キャンドルの薄暗い明りが、女苑の胸中にある暗い影を包み隠していた。

そんな中、一人の青年が勢い良く入ってくると、女苑の隣に座った。

「マスター、ウイスキー。ストレートで」

スタンドカラーに短めの袴をはいた書生は、出されたウイスキーを睨みつけた。そのまま



二秒ほどした後、力強くグラスを掴むと一気に煽った。

「——ゲッホ……ゲッホ……エッホ……!!」

どう見てもやけ酒の飲み方である。ただ、慣れない酒の飲み方をしている若い書生が妙にかわいらしく見えた女苑は、声をかける事にした。

「なに……どうしたの？ 私に言っつてくらん」

不審な目を向けられながらも、自暴自棄になっている書生は話し始めた。

彼の名は、木村一郎という。

とある家に生まれたが、今は書生として別の家で暮らしており、その家の雑事をこなしながら日本史と幻想郷史を勉強しているらしい。では、どうして自暴自棄となりヤケ酒を煽るようになったのかというと、彼は語る。

「その家のお嬢さんと恋仲になってしまつて——」

引き裂かれてしまった、という事であった。

幻想郷にも恋愛結婚は増えてきたが、どこの時代、どこの場所にだって『古い家』という

のは存在する。彼や彼女の家は自由恋愛を許さなかった。

書生として間借りしている者が、その家の人間と恋仲になるのは勿論だが、『家』を通さなかつたというのが問題であつた。

「それでヤケ酒かあ……」

ここで一つ、女苑に遊び心が現れた。

「だったらさ、行く所まで行つちやおうよ」

そのまま二人は夜の繁華街へ消えて行つた。

情熱的な時間が過ぎた。

女苑が紙巻きタバコに火を点けた一方で、一郎は大の字になつて息を荒くしている。初めての官能であつた。

こんな世界があつたのか。

そう、一郎は受け止めていた。女の官能は史書だけでなく友人の口の端にも登っている。老翁すらも若い肢体に夢中になる話は途絶えない。

その真実を、今、一郎は理解した。これまで文机に向かっていた時間の一切を、空虚なものに押し込めてしまうほどの官能を、一身に受けた。

そしてこの体験が、一郎の倫理を狂わせた。

「女苑さん……」

「んー？」

「結婚してください」

「げほっ!!」

あまりに突飛な事を言い始めたので、思わず女苑はむせてしまった。

——何バカな事を

そう言おうと思つて姿勢を変えた時、一郎が両手両膝を合わせて座っているのを見た。ただならぬ雰囲気を身にまとっている。

「ボクの本当の名字は、木村一郎稗田時行。御阿礼の子——稗田阿求の縁戚に当たる人物です」

稗田の一族。

となれば、女苑からしても話は変わってくる。

稗田の一族には幾つか『家』がある。その中から『御阿礼の子』を出した家が嫡流となり、『稗田氏稗田家』を名乗る事になる。

そんな稗田一族の男が、両手をつけて結婚を懇願してきた。

自然と女苑の口角が上がる。

——万が一。

(——万が一、私が次の『御阿礼の子』を産んだなら……!!)

その時は、稗田の財産管理権の一端を担うであろう。

蒔絵で彩られた駕籠を乗り回し、ブランド品に身を包み、屏風のような庭園の四季を眺めながら山うに豆腐や山川の珍味を食べて日々を過ごす。

そんな豪華な生活だって夢ではない。

「そうね。それもいいかもね」

体面を整えるのが精一杯であった。

三か月後。

事前に仔細を記した手紙を人づてに渡していた女苑は、一郎とともに木村家の邸宅にある、庭の白洲に通された。そして筵の上に座らされる。『三か月もの間、行方をくらし、見知らぬ女を孕ませた』という内容はこういふことなのだ、言外に告げていた。

鹿威しの荘厳な音が女苑を威嚇している。

(まあいいさ)

女苑は内心で高を括った。

すべてはここから始めればいい。分家であるというのに白洲まで存在している家だ。多少『質素』な生活を求められる必要があるだろうが、おおむね問題ない。

それよりも、女苑には気になる事があった。

(奥の襖……何で開いてる……? 誰かいるのか?)

その答えを探す間もなく、一郎の叫びが庭に響き、慌てて女苑も姿勢を正した。

「母上!!」

「まったく……どこで何をしているのかと思えば……」

一郎の母が縁側に立ち、侮蔑の視線を恥ずかしげもなく投げかけてくる。

「もちろん、全て私達の不徳の為す所と存じます!! ですが、生まれて来る子に罪はありません!! どうか私どもの結婚を許していただきたく思います!!」

バツ、と一郎が頭を下げるのと同時に、女苑も頭を下げる。

その様子を見届けると、母親が言葉を続ける。

「とりあえず、そのままお待ちなさい。相談をして参ります。ああ、足は崩して結構」

そう言うとも母親は、襖の前で正座を挟み、声をかけ、両手でもって襖を開けた。その後の事は、女苑にはわからない。

太陽が夕焼けに転じた。

時折、下女が水や茶を持ってきているため、そこまで辛くはないが、女苑には只々、空虚

な時間が疎ましかった。そんな中、正座をして姿勢を崩さない一郎の事を、女苑は心底感心していた。

「母上!!」

「静かになさい」

その言葉で、女苑も慌てて姿勢を正した。

母親が縁側ではなく、奥へと進む。

「決裁が出ました」

鹿威しの荘厳な音が、雑音を粛正した。

「これより、その決裁の仔細を伺います。心して聞くように」

——どうぞ。

母親の言葉を合図に、

「失礼します」

と、女の声が響いた。杏の花のような小さな口から出てきた、まだ年若い少女の声だ。一

郎が、愕然とした表情を作る。そしてその声の正体を知った女苑もまた、自らの行いを後悔した。

「お久しぶりです。稗田の頭首、稗田阿求です」

「あー？ いつかの疫病神？」

『御阿礼の子』稗田阿求。

『博麗の巫女』博麗霊夢。

この二人が、縁側にて二人を見下ろしている。

「一郎さん。貴方はご存じないようですが、稗田一族では私の面通しが必要なんです。その方が、こ・う・い・つ・た・間・違・い・も・防・げ・ま・す・の・で。では霊夢さん、その疫病神退治。お願いいたします」

その瞬間、女苑は全てを察した。

この面通しが行われると決まった瞬間、稗田阿求に話が行く。そしてそのまま阿求の面通しが、襖の奥から行われた。記憶を完全に覚えている阿求の記憶力でもって、相手の素性を



把握する。

そして女苑は疫病神である。

阿求の決裁により、妖怪退治の依頼が博麗神社へと放たれた。これを博麗霊夢が了承し、そのままこの場に現れた。

霊夢の標的は――。

「チッ!!」

もう稗田の家を乗っ取るや否や、という段階ではない。女苑一人で霊夢に敵うはずがないのだ。逃げの一手を打つに限る。

「逃がすか!!」

扉を飛び越えて霊夢が追いかけてきた。

霊夢の弾幕が女苑を討つのに、五分とかからなかった。

それから、半年が経った。

二人の男女が、人目を憚るようにして薄暗い路地裏へと入っていった。一人は派手な服に身を包んだ女——女苑である。もう一人は、太った男——山左衛門であった。いくつかの貨幣が入った革袋を女苑に渡している。

それを受け取ると、女苑はしゃがみこみ、山左衛門の股間に顔を埋めた。

「お……お……お……」

首を逸らして、山左衛門が甘い快感に酔いしれる。淫らな水音が激しくなると同時に、山左衛門が女苑の頭を両手で捕まえる。

「うおっ……お……お……お……!!」

力強い呻き越えとともに、繁殖に必要な液体が女苑の口に流れこむ。不快な粘着質な液体の持つ臭いが、女苑の鼻を抜ける。

「じゃあ……また、頼むよ」

手をヒラヒラと振りながら、山左衛門は去った。

女苑は口から液体を吐き出す。そして、べたりと、地面の上で未練がましく震えそうな粘着質な液体を一瞥して、新たに誓う。

——もう一回、やるだけだ。(了)



藍もどき

金髪の小僧

とある鮫を出す屋台で、ある秤屋の小僧が馳走してもらう。それは小僧に知られぬように、議員を務める大尽が計らったものだった。小僧がなけなしの小遣いで鮫を一つだけ食べようとし、その値が上がっていたことに気づいて、掴んだ鮫を置いて出て行ってしまったことを見た大尽が、小僧に情けをかけた。そういうことだ。

この話を世に知らしめた作家は、話を最後まで描かなかつた。大尽の住所を聞き出した小僧がそこを訪れると、人の住む様子はなく、稲荷の祠があるだけだったという最後である。この終幕の場面は小僧に対し、残酷なことをしてしまふような気がするから筆を置くと、作家は最後に語っている。

さて、この小僧。秤屋で一所懸命に勤め抜き、番頭となつて……という生涯を送つたものかというところ、そうでもない。

ある筋では、ある年の敷入りで生家に帰つた方がいいが、そこで奉公替えを父に言い渡され、

秤屋ではなく呉服屋で奉公のし直しとなってしまう。奉公のし直しと簡単に言ってしまうが、それは最初からの、七、八歳の子供がやることからのやり直しということだ。十四、十五といった頃の小僧には屈辱にしかない。当然のように、小僧の素行は乱れ、腐って行き、そしてついに、彼は奉公先の呉服屋から逃げ出した。その後のことは暗闇の中のことで知られていない。

またある筋では、十八になって番頭たちの秘書のような位置となっていた小僧は、店の金に手を付けて着服したという濡れ衣を着せられ、獄に繋がってしまう。陥れたのは同年の、手代で出世が止まってしまった少年。この少年は小僧が着服したとされた金を使って株相場を当て、成金となったものの、その後の恐慌で身を持ち崩し、最終的には恐慌に続いた戦争の空襲で死した。この報せに獄から既に解放されていた小僧だった男が接すると、欲をかくからだの一言で済ませてしまった。その時の彼は国を出て、祖国の戦の相手側で秤のなんたるかを追及する職にあったと聞く。

また別の筋では、奉公先で出会った文学という道ならぬ道に邁進するようになり、仕事の

傍らで文章を書き散らすようになった。その数年後に仲間たちと自ら雑誌を刊行し、その後の文壇に於いて中枢とも言える立場を築いていく。

更に別の筋では、相変わらず腹を空かせてふらふらと歩いているところを馬車に轆かれてしまい重体となる。生家に戻されて生死を彷徨った後、なんとか快復するに至り、新たな奉公先を探す。それは難航するが、なんとか田舎も田舎にある道具屋に奉公することが決まり、そこで独立できるまで勤めた。しかし、その商家の娘がとんでもないお転婆ぶりである……。

このように、小僧のその後は作者によって確定されることがなかったために、いくつもの分岐点を持つ、実在性が成立してしまった。実在というものは厄介で、幻想の存在でありながら、現実の中に生きる苦しみをもたらす。

稲荷の祠で、知り合いと世間話をしている中で、私はこの話を聞いたのだ。随分と残酷な作家があったものだ。そう思っていたら、その作家は山手線に撥ねられていた。これも因果応報と合掌したものだ。

今頃となって、幻想から実在に変じることとなった小僧のことを思い出したのは、どこぞ



の巫女と一緒にたつた今、我が家になだれ込んできた金髪の小娘がいるためだ。酒瓶片手でなかつたら、弾幕の末に一回ピチュンと言わせなければならぬところだった。

どうして金髪の小娘と小僧が重なったか。それは彼女が分岐点を複数持つ、幻想と実在の狭間で揺れる存在だからだろう。このまま騒がしい人の範疇であり続ければ、人里郊外の道具屋の主人の初恋は破れることとなるし、人の範疇から逸脱すれば、隣で笑っている巫女によつて消されることとなる。

彼女が選ぶ道は前者であると、大方と同じく私は思っている。だが、だ。その姿は鯨を掴んで代価を知り、鯨を離して店を出ていく小僧の姿が重なってくる。それを見て、私はしかし、大尽には成れないこともよく知っている。大尽のように馳走することは、私の懐具合では出来ないことだ。ただの使い魔。番頭でも鯨屋の主人でもない、語られなかった鯨屋の客の一人にすぎない。

翌日のこと。アブラゼミの賑やかな中、昼を過ぎてから起き出してきた主人が、洗濯物を取り込みにかかった私の背中に声をかけて来た。

「あの娘、どうするのかしら」

「そろそろ決め時だとも仰いますか」

「ええ。もう三十路に入って半ばを過ぎているのよ」

本当のところ、どちらの方の話なのかはわからない。同年であるから。ただ、私は主人の指す娘が金髪の方であるのは推し量ることができていた。

「巫女が次代をまだ考えていませんからね」

「それが一番の問題ね。あっちには、次代の私たちになってもらわれないといけない」

主人がまさかそんなことを考えているとは思わなかった。驚きを以て振り返ると、寝間着姿のまま縁側に腰を下ろす主人の、頭を物憂げに傾げた姿があった。

私たちの位置というと、結界の維持が第一義となる。次に巫女の支援。閉じた狭い世界で

あるこの郷が滞りなく動くように、種々に計らうのが役目である。主人の言うところは、巫女の支援に関することだろう。役割の分担が必要になると、主人は考えているのだ。

主人が巫女の支援を行うのは稀だ。郷が根底から崩れるような異変が起きようと、寝ているときは寝ているのが主人である。胡散臭いことこの上ないのは周知で、最近の噂では、実はぬらりひよんではないのかとも言われている。妖怪総大将にするには胡散臭いが。

主人が支援する場合は郷どころか、郷の中にある人妖ともどもが消え失せるような大事の時だ。実際、今代の巫女になってからその事例は何度もあって、その度に主人は胡散臭い笑顔を貼り付けて巫女の前に立ち、胡散臭く巫女を誘導していた。時にやられ役までも演じながらである。その部分を、あの金髪の小娘に任せようというのだ。

「あの娘しかいない。断言できる」

「我が主にそう言わせるまでなのですか」

「あなたも見てきたでしょう。行動力にあふれ、魔法の腕前は正統な魔女に引けをとらない。それでいて冷静沈着で論理的な思考をし、郷のことを第一とすることができ。旧世代まで

にも知己がある。外の世界にも繋がりがある。しかし」

主人が濁した言葉の続きには、こちらには任せてしまう勇気がないとあった。使い魔としての繋がりに漏れて来た主人の思念だ。それは悔恨、後悔といった文字にして余りある、主人自身への怨嗟に糊塗されてあった。

使い魔である私が主人のそれを慰めることはできない。慰めたとして、主人にとってそれは自慰行為でしかない。冥界の姫君の言葉であれば多少は響いてくれるだろうか。それとも後戸の神によるものならば、素直なところを吐露してくれるのかもしれない。そして私はそこで止まってしまふ。立ち入ってはならないと。

「許します」

主人のこの一言がなければならぬ。普段の戯言とは異なるそれを吐き出すには、許しが必要ならぬ。歯止めが外れる。

「申し上げますと。勇気などと仰いますが、まだご自分でなさいただけでございます。今代の巫女であるからこそ、まだお渡しになりたくない。ただそれだけでございます。お悔

みのご様子と察し申し上げますが、そのお悔みですら傲慢なることとお見受けいたします。金髪の小娘と私も呼んでいます。しかし、我々が彼女に強いてきたことは、決して正道であるとは考えられません。その上で、更に強いると仰る。勉めよと仰る。それはそれは残酷なことでござましよう。しかも、面と向かって話すでなく、常のように策謀を巡らせるお積りでいらつしやる。私が人倫を語るは片腹痛いと自ら思いますが、そんな私の愚かさにも劣ることであると、この際ですからはっきりと申し上げます」

「狸の大将にも、同じことを言われたわ」

「奴のこと、もつと手酷く評されたと思えますが？ その上で私にもですか。いつから被虐の性癖をお持ちになられたのです。この件は勇氣ではございません。我が主に最も縁遠いであろう、誠意にございます。これまで何もなさらなかったことを悔やむのであれば、その分を誠意に従ってなさるがよろしいでしょう。この後、白玉楼にでも泣きつきますか。それとも河原の神の祠で嘆きますか。どちらでも良いですが、夕飯の支度がございます。帰宅時間はいつか、きちんと仰ってください」

「そ、そこまで。そこまでよ！」

いつもやり取りする世間じみた言葉で、主人に歯止めをかけてもらおう。これ以上を言葉にして伝えると、主人は来年の晩春まで起きてこないかもしれない。この主は、存外に精神面に脆さを持っている。だから、勇気がないなどという、意気地のないことを言い出すというのは、少し穿った見方だろうか。いずれにしても、私は大尽のAではかった。Aが相談した、同じく議員で鮫を通ぶって食べるBだったということだ。

通ぶってというところが、最も私とBが共通するところだろう。人の心など、私にわかるはずもない。受け答への通例として予測される反応を疑似的に做るだけだ。この疑似的に做るところところがBであり、私であるのだ。それは、主人にも適用できる。そのはずである。もし私がBであるならば、主人はAであるはずで、Aは小僧に馳走する。それも策謀を巡らせて。しかし全てを做ることはできない。それが勇気ではなく誠意であるという違いに現れる。果たして、主人は「出かけてくる。遅くなる」と言つて、スキマに姿を消した。

季節は少し移ろい、ヒグラシが鳴く次第となつて、湧き立つ雲に宝船は見えないかと眺める頃合い。再び巫女と金髪の小娘が酒瓶を今度は両手に持つて、我が家に来てゐる。酒を持ち込めば許されるとでも思つているのだろうか。実際そうである。郷の掟だ。

台所で私は肴作りに忙しかった。そこへ巫女が、どうやら神社の結界を弄つて持ち込ませたらしい、銀色ラベルのビールを持って来た。大瓶の表面には無数の水滴が細かく付いていて、冷たい湯気も瓶底の辺りから放たれている。

巫女は勝手に戸棚を漁つて栓抜きを掴みだし、ビールの栓を開いた。しゅぽんという小気味良い音が響く。同時に取り出した一合のグラスコップは二つ。彼女はそれの一つを手にして、逆の手にある瓶の口から黄金を波打つように注ぎ入れた。泡が立ち、白い領域が三分、黄金の領域が七分とコップが分かたれる。もう一つのコップにも同じことをした巫女は、無言で片方を私へ差し出してきた。

夏場の厨は熱い。熱は私にとって大敵であるが、誰も肴を作ることをしないので、私がやるしかない。そこにやって来た、冷え冷えとした黄金の酒の盃。受け取らない方法は全く無かった。

巫女の掲げるコップに軽く、私の持つコップを合わせる。かつんという硬い音がした。互いに黙したまま、器の縁に口付ける。まずは細やかな泡が香り、続いてきんきんに冷えた黄金色の大波が口腔を満たす。何故、辛口なのか。続く圧倒的な喉越しの良さ、切れ味を堪能するためである。一息に飲み干してしまうのは何故か。流し込む程に心を躍らせる淡麗がそこにあるからである。コップを調理台へ叩きつけるように置けば、漏れ出た吐息に声に乗っていた。

「ぶはあ」

ここに優勝という二文字ほど似合うものはないだろう。敗北者のための時間などはない。なぜならば優勝であるのだから。愛するために生まれ、そして優勝を果たしたのだ。

「また、回りくどいことをしてさ。どうしてあんたたちは、素直に話すことができない



のかしらね」

「なんのことだかさっぱりだな。我が主が胡散臭くないことが一度でもあったか」

ないという答えから、主に似てしまい言葉が足りないようになった巫女が言いたいことに当たりがつく。今まさに酒宴の場となった居間で、巫女の調停によって直談判が行われているということだ。結果は承諾だろうと巫女は言う。

それで良い。何か事を決めるといって一人で思い悩む者ばかりのこの郷だ。その中であちらこちらと出歩いては打算含みでも関係を作り上げるあの娘は、巫女という独り歩きを強いられる役目に必要な存在なのだろう。そう思えるから、主に誠意を見せると柄にもなく言ったのだから。

巫女が二つのコップに二杯目を注ぐと、瓶は空になった。

郷が新しい段階に入る。人間が避けられない、世代交代が来る。

「私の位置には猫が入るが、それでいいな」

「冗談。私が入るわ。人のままで居られるようにね」

主と同じ胡散臭い笑顔を彼女が貼り付けている姿を思う。すると、すぐさま今の巫女が彼女を蹴り飛ばしてしまう姿に変化した。あくまで、人のことは人が、私たちのことは私たちがやる。この主たちが定めた掟の、あるべき姿であると予測できるものだった。

金髪の小娘と巫女の分岐点は、まだ先にもある。なければならぬ。人間という実在なのだから。それは苦しく、残酷なことである。その残酷さも全て、この郷は受け入れる。その小僧がたどり着いた人里の道具店のように。〈了〉

改  
流行感冒とこいし

流行性の感冒が幻想郷にはやって来たと聞いた。私はそれをどうかして地底に入れないようにしたいと考えた。その前、街道の鬼が、近く催される地上の花見に連れ立って参加する事を勧めていた。然しその頃は感冒がはやり出していたから、私は地上へは極力誰もやらぬ事にした。実際花見や会食で大分病人が多くなったという噂も聞いた。私はそれでも是非局直庁での定例の報告などのために時々地上に出ることがあった。そして狭い応接間で可恐々々話を進めた。幸に家の者は——飼育している動物達も、誰も冒されなかった。猫を使いにするような場合にも私は愚図々々話し込んだりせぬようにと喧やかましくいった。元々死体を好んで扱う猫はその衛生観からというよりも、私の劍幕のほうに気圧されて億劫ながら従っている様子が見て取れた。何であれ、迂闊な真似をしなければ私は満足だった。

押並べて酒好きの多い幻想郷では、春ごとに桜を囲み、花筵を敷いて宴会を開いていた。地底の妖怪の幾何かも密かに混じっており、また我が家の猫や鳥がそれに興味を示していることを私は知っていた。然し今年だけは特別に禁じて、その代り感冒でもなくなったら地底

でも何か催しを考えよう、と話していた。

「こんな時勢に宴会なんて行ったら、誰でもきつと病気になっちゃうね」こいしが空にこんなことを言っていたそうだと燐から聞いた。見す見す病人を増やすに決まっているのに、どうしてそんな宴を中止しないのだろうと思った。

私は或る夕方、所用で一寸地上へ出て行つた。近くで、酒によって理性の薄められた声が響いていた。心の裡を覗くまでもなく、酔いの程度が伝わってきた。人々が集っているのは、群れからはぐれた小鹿のように脈絡なくぼつんと突っ立っているような桜で、足許に大した敷物もなかった。総じて見窄らしいようだが、若い男女達が亢奮こうふんして歓んでいる様子は景気がよい気もした。帰りの途上では重箱を抱えた婆さん連中を見かけた。揃いの半纏を着て、大口を覆いもせずに話していた。皆、流行感冒など眼中にあるとは思えなかった。明後日あたりからきつと病人が増えるだろうと思つた。

その晩は八時頃まで本を読んで、それから風呂に入った。多少無理を言つて、以前から地霊殿にも温泉の湯を融通してもらっている。地上を長く歩いた日に浸かる湯船は格別だった。

済んだ時に、

「空いたわ。直ぐ入りなさい」居間を覗いて声をかけた。はい、と空が答えた。

「こいしはどうしたの」私は何とはなしに訊いてみた。「こいしもいるでしょう？」

「さっき外に出て行ってましたよ」燐が答えた。

「何しに」引き攣った声が出た。

「さあ、特に何とも言わず、一寸出かけるね、と」

「用事があったのかしら。どうしてこんな時間に」

燐も空も黙っていた。事実、何も知らないようだった。

「何にしても、いけない」私は言った。旧地獄は一日の営みをおよそ終えており、何事か事件の生じるような時間ではなかった。「こいしはきつと地上へ行つたんだ。宴会なら夜明けまでやっている、花見を見に行つたんだ」

「でもこいし様、言っていましたよ。こんな時に宴会に行くなんて、みたいな」

「それでもわからない。お燐、あなた、直ぐこいしを迎えに行つておいで」命じて、私は不

機嫌な顔をしていた。「あれ程言っているのを、よく知っているはずなのに」

燐はどうしようかしらんといった様子だった。面倒、というより、こいしが本当にどこかへ行ってしまったのだとしたら今更易々と見つけられるはずがないのに、と考えているのがわかった。それは私自身もよく承知してはいた。

「……行かないのなら、早くお風呂に入りなさい」

「はあい」

「きつと直ぐに帰ってきますって」空は適当を言っているようだった。

「帰るかもしれないけれど。何方にしろ馬鹿だよ。行けば大馬鹿だし。行かないにしても疑われるに決ったような事をして」

私達は揃って起きていようという話こそしなかったが、帰って来た時のために部屋で起きていた。私は本を見て、燐は縫物をしていた。空は早々机に突っ伏していたので燐に部屋に連れて行かせた。そうして十二時近くなったが、こいしは帰らなかった。

「本統に行ったんでしょね。まったく、こちらの気も知らないで」

私は今日地上に出ていることもあり、万一を思つて自分だけソファに仮眠の用意をした。一時頃まで本を見て、それから灯りを消した。

間もなく飼犬の吠えるのが聞こえ、然し直ぐに止んだ。こいしが帰つたなと思つた。玄関の開く音、廊下をばたばたと走る音がするかと思つたが、そんな音は聞こえなかった。

翌朝眼をさますと私は寝たままさつそく空を呼んだ。

「こいしはなんて言っているの」

「地上には行かなかつたんですつて。橋姫のところに行つたら、つい話し込んで了しまつたんですつて」

「そんなわけないでしょう。第一往来で誰と接しているかわからない橋姫のところにいるのだからいけない。こいしを呼んで」

「本統に行つていないらしいですよ。風邪が可こ恐おそいからといって橋姫も表に出ないとかで。こいし様が訪ねたから出て来たよ」

「こいし。こいし」私は自分で呼んだ。空は彼方へ行つて了しまつた。



「地上へ行かなかったの？」

「行かないよ地上なんて」いやに明瞭はつきりとした口調で答えた。

「こんな時勢に、橋姫のところにも何時までもいるのはいけないでしょう」

「別にあの子も風邪をひいてはいないよ」

「とにかく、疑われるに決まった事をするのは馬鹿だよ。若し行かないにしても行つたらうと疑われるに決まっているでしょう……それで何を話したの」

「なんだったつけ。忘れちゃった」

「あんだ、本統に花見には行かないね」

「地上に行かないもの」

私は信じられなかったが、答え方が余りに明瞭していた。疚しい調子はほとんどなかった。椅子の上で膝をついているこいしの顔は部屋の灯りを背後から受けていてよく見えなかったが、その言葉の調子には偽りをいっているようなところは全くなかった。が、何だか腑に落ちなかった。調べれば直ぐ知れる事だが調べるのは不愉快だった。

「ああはつきり言うのなら、それ以上疑うのは厭だ。然しそれはそれとしてあの子の振る舞いは嫌いだ。

こんな風に思った。

「なるべく、ペット達に近寄らないようにしなさい」

是非局直庁から使いが来たので、私は書齋に行つて話していた。そして暫くするとニャアニャアという猫の声がして、それを抱いたこいしと一緒に空が登ってきた。こいしはもう平常通りの元氣な顔をして動物達の相手になって、遠慮のない表情で何かいつている。私は無神経さに腹を立てた。

「馬鹿。こいしは離れていなさいと言つたでしょう。二三日は遊んじゃあ、いけない」私は不機嫌を露骨に出していった。空もこいしも厭な顔をした。動物達はこいしに同情しながらも慰めるわけにも行かない変な気持ちでいるらしかった。

（さとり様はうたぐりすぎです。行かない、とあんなにいつているのに）

（ほーんと、何かいい出すと、執拗いんだから）

そんな事を考えているのが読み取れた。

こいしは少しぼんやりした顔をしていたが、猫を床に放つと、そのまま小走りに引きかえして行った。

私は不愉快だった。如何にも自分が暴君らしかった——それより皆から暴君にされたような気がした。こいしは素より、燐や空までが気持の上で対岸に立っているように感ぜられた。いやに気持が白けた。間もなく閻魔の使いは帰って行った。客人の前で大人気ない様を晒したと思った。私も部屋を出た。

「こいし。こいし」と呼んだが、返事がなかった。

「馬鹿な子」

私はむツとしていった。

私には予てから、妹については、そのまま信じていい事は疑わずに信ずるがいいという考えがあった。私は他者の心の裡を読むことができるサトリであるが、妹にだけはそれが通用しない。信ずるとか疑うとか、そういった判断が求められるのはこの世で妹ただ一人である。

誤解や曲解から行き違い、悲劇を起こすのは身内相手に何よりも馬鹿気た事だと思っていた。今朝こいしが地上へは行かなかつたと断言したときに、私はそのままになるべく信じてやりたく思っていた。実際、嘘に決つているとも考えてはいなかつた。半信半疑のまま、その半疑のほうをなるべくなくそうと知らず努力していた形であつた。ところが半信半疑と思ひながら実は全疑していたのが本統だつた。こういう気持ちの不統一は、それだけでかなり不愉快であつた。そして若しもこいしが実際行かなかつたものなら、自分の疑い方は少し残酷過ぎたと思つた。こいしが旧地獄街道を駆け抜け、自分の悪口を吹聴して回る様子さえ思ひ浮かぶ。誰が聞いても解らず屋の姉である。第一自分は間欠泉騒動の際に疑いなくこちらを疑つて来た巫女達について考えの足りない連中としておきながら、実行ではそれとまるで同じ愚をしている。これはどういう事だ。私は自分にも腹が立つてきた。

「さとり様、なんだか嫌な奴みたいですよ」

氣にしている急所を憐が遠慮なくつつ突き出した。私は少しむかむかとした。

「お黙りなさい。それより夕飯の支度はあるの」

「これから外へ行って何か調達して来ますよ」

「いい、私が行って来る」実際、出て行ったこいしをほっても置けない。

四時頃だった。私は財布と風呂敷を持って家を出た。

街道を歩いていると、橋の袂で三人連れが屯しているのが見えた。橋姫と土蜘蛛と、それからこいしだった。私は自分の疑い過ぎた点だけとはかく先に認め、そしてそれから何を言われても仕方がないだろうと腹を括った。橋に近づいて行くと、こちらに気付いた土蜘蛛が露骨にしまったという顔をした。ここまでの話に特に関わりの無い筈なのに、何故そんな顔をするのだろうかと思った。

(ああもう、パルスイと一緒に誘われて、花見に行ったのがばれちゃうじゃない)

「やっぱり行ったのね」

(ちよつとこれ、もう誤魔化せないわよ)

「こいし、家でよく話したいから来なさい」

是非局直序の使いが地霊殿にまで足を運んだり、反対に私が出向いて話をしたりする、その要件のひとつがまさにこいしの処遇についてであった。こいしはサトリの身でありながら読心の瞳を閉ざし、同時に誰からも心を読まれない存在となった。閻魔らはその奇異な性質を脅威として認識し、或いは除こうとしている。封印されし妖怪の集う地底からなお隔離し、封じる措置をも考えている。私は姉として、地底の長として、こいしをどのように扱うべきかを考えなければならない。

明瞭と嘘を言うこいしは、そしてそれを見抜けない事は、恐ろしかった。ペット達が怪我をした場合、事故か何かに巻き込まれたのかと訊いた時、何も見ていないと断言をする。どころか自身が悪戯を仕掛けている。うっかり傷を付けてしまう。私には原因が知れない。そういう時にも、別に何もなかった、と断言されてしまう。これをやられては困ると私は思った。こいしは彼岸に引き取られても仕方がないのかもしれない。あんな様子でそばに置いておくのは、可恐い。

「ちよっと」橋姫が声を上げた。「少し地上に出て行ったからって、そんなに騒ぐような事

なの」

「そうだよ。嘘だとしても、その位の事で、矢鱈やたらに非難するような方が余程狭量じゃあないの」土蜘蛛も脇から反発を始めた。不愉快を隠そうともしていなかった。私は言葉に詰まったが、然し彼女達が揃って不要不急な外出をしていたのだと思うと、此方も余りいい気はしなかった。

「とにかく、家に戻って」と私は言葉を緩めて言った。然しこの二人には叮嚀に聴く余裕はないようだった。当のこいしは橋の欄干に腰掛けて優雅に脚を揺らしていた。

「さとり様」

振り返ると燐と空が並び立っていた。私が連日外を出歩くのを案じて、後を付いてきたらしかった。

「今回は許して差し上げませんか」と燐が小声で言った。燐は私の事情を察していた。隣にいる空は要領を得ない様子で、それとなく似たような表情を浮かべていた。

「只でも悪評が付きまとう地底ですから、失策で追い出されたというと、全員が何事か言わ

れてしまつて大変ですよ。何処も彼処も病気が蔓延して、馴染んだ生活まで侵食されている状態なのに。この二人にしたつて、ヤマメは病気を扱う妖怪として一層嫌悪されるに決まつているし、パルスイにしても思うように出歩けない人々の不満に乗じていると思われてしまふ。大変角が立ちます」

それが建前で、

（色々面倒だし、あたしまで地上に行けなくなると困るし、今のさとり様大人気がないし）  
というのが彼女の本音だった。

「こいし様だつて今度で懲りたでしょうよ。もうあんな嘘はきつとつきません」  
状況を何もわかつていない空が適当に言った。

「……それなら、いいわ」

地底の長として物事を考えなければならぬことに変わりはないことに変わった。地底の妖怪というのは皆、何か後ろ暗い性質や経歴を抱えて暮らしている。こんな情勢にあつて、私の痼癩一つが、どんな理由で幻想郷じゅうに不快な根を残し兼ねないかわからないのである。従者



として、燐の働きは大出来だった。

その晩私はソファに腰掛けて本を見ていると、

「さとり様、今ですね」そういうながら燐がにこにこして寄って来た。

「さとり様はそりや可恐い方なんですよ、いくら心を読めないこいし様が上手に嘘をついたって、洞察と推理で全部見抜いてしまうんですから……っっていったんです」

「そうしたら？」

「閻魔大王みたいだね、だそうで」燐はニヤアと笑って首を縮めた。

「馬鹿な子」

「その位に思ってもらっているほうがちょうどいいんですよ」燐は真面目な顔をした。

ところがこいしは未だ本統の事をいっていなかった。実は橋姫や土蜘蛛と合流する以前に、一人で行っていたらしかった。鬼が目撃していたのだが、あちらからこの話をするのではなく、それが少し気に食わなかった。私はそのうち、こいしがその話を種明かしのよう告げるか

も知れないと待つような気持ちでいた。然しこいしは遂には知らん顔をしたままだった。忘れて了ったのかも知れない。燐の御愛嬌な嚇しは、余り役に立ってはいなかった。

こいしは全く平常の通りになった。然し私のほうは前のような気持ちではこいしを見られなかった。何だか、嫌いになった。それは閻魔の求める処分を踏まえてというよりも、もつと只何となく厭だった。私は露骨にこいしには不愛想な顔をしていた。

三週間経経った。流行感冒も大分下火になった。地上の人里では何人亡くなった、何人感染した、というような噂が一段落ついた話となっていた。私は、気をゆるした。ちょうど家に引いている温泉の具合が悪くなっており、その調整の為にその頃毎日二三人、職人が地霊殿に立ち入っていた。序でに溜まってきた本の置き場に棚を作ってもらっていて、それにも少し日がかかった。私は浴室の仕様や、部屋の模様替えの段取りを指図すべく、職人達と過ごす時間が増えていた。

そしてとうとう流行感冒に取り附かれた。

職人からだった。彼らの中には既に罹っていた者がいたが、大した症状も出ていなかった

為に気付かずになっていたのだと後に判明した。四十度近い熱は覚えて初めてだった。身体が無闇とだるくて閉口した。一日苦しんで、翌日になったら多少よくなった。ところが今度は隣に伝染した。人間の姿をとる化猫とはいえ、動物にも伝染する事が明らかになり、この上は地霊殿に棲む他のペット達にどうかして伝染したくないと思った。手を打つより先に、間もなく空が変になった。用心しろと喧しくいつていたのに、無理をしたので尚悪くなった。感染自体、鳥にとって余計に事情が悪いらしく、それは八咫鳥いへとと雖も免れられなかった。家に出入りしていた職人達も、言うまでもなく体調を崩して引き上げた。

健康なのはこいしだけになった。

そしてこいしは驚く程に家の事を済ませてくれた。

未だ動物達に伝染すまいとしている時、距離を置いた私達に代わってこいしは積極的に世話を焼いた。例えば大きな犬は夜中でも動き回り、誰かが構ってやらねば大人しくならなかった。こいしが腹を撫で背を撫で、くしゃくしゃになって漸く寝付かせたと思うと、今度は別の犬がばたばたとそこらを駆け回り始める。こいしは又そちらの対応もしてやった。小鳥が

糞をするのを取り去り、定刻になれば餌を与えていた。寝付けない夜、私は時々そんな様子を覗き見た。人手が足りなくなつて普段以上の家事もしなければならぬのに、更に夜中まで皆の相手をする。私は心からこいしにいい感情を持ち、露骨に邪慳にしていた事が気の毒でならなくなつた。全体あれ程に喧しくい言つて置きながら、その私が病気を輸入して皆に伝染させ、処分まで考えられたこいしだけが無事で皆の世話をしている。こいしにしてみれば痛快でもいい事だ。皮肉を言われても仕方がなかつた。ところがこいしはそんな素振りも見せなかつた。普段は家の事に関心があるともいえないが、その時はよく続くと思う程に働いた。彼女の心理はわからないが、どうも、以前に失策をしている分を取り返そう、という気持ではないらしかつた。もつと単純で安直に感じられた。私にはそれでも善意に解せられるのであつた。地上の宴会に混じりたいから嘘をついて出掛けた、その初めの単純な気持は、私達が困っているから出来るだけ働いてやろうという気持とそう由来を違えないのではないかという気がした。

暫くして疫禍は去って行った。段々、それまで非常によく働いていたこいしは元の木阿弥になって来た。然し私達のこいしに対する感情は悪くならなかった。意味の不明な挙動をした時は呆れもしたが、じりじりと不機嫌顔で追い詰めるような事はしなくなった。大概の場合、何があっても三分あとには普段通りに物が言えた。

そのうち是非局直庁に赴く用事があり、私はまた四季映姫・ヤマザナドゥと対面した。彼女が口にしたのは、こいしを処分や封印ではなく、門徒として呼び込みたい向きが現れたという話だった。聞けば、地霊騒動のち居を構えた命蓮寺の僧侶が、こいしに仏門的な興味を示しているらしかった。私はこいしが山の神社で巫女と遭遇した話を思い出した。こいしは神社と寺の違いなど恐らく少しも知らずにいるのではないかと思った。何しろ地底の妖怪には教義など外れた者が大勢いる。それでも至極平穩な日々を送っている。

こいしは寺に行く話が厭ではないと言っていた。私は厄介を追い払う心持ではなく、意向を重んじるような心算で、こいしを預けてみる事を決めた。連れ立って命蓮寺に向かう際、いつか若者達が囲んで宴を開いていた小さな桜を見つけ、今度地霊殿の皆で花見をしようか

と尋ねた。

「別にいいよ、お酒そんなに飲まないし」

こいしは随分不愛想に見えた。その裏側の気持ちはやはり、読み取られなかった。

こいしがいなくなると家の中は静かになった。季節が移り替わるような淋しさが感ぜられた。「花見を問い詰めた時、追い出さなくてよかった」私は憐に向けて呟いた。「あのまま別れたら、こいしは厭な子として私の中に残るところだった。あの子の方でも同じ。厭な姉だと思っただでしょうね」

今もその時も人物は変わらない。けれども、関係が充分でないとお互い悪く思うし、充分であれば悪い相手でも憎めなくなる。病に冒されたことで思い知らされた。

「今頃お寺で、嚏くしゃみをしますよ」と憐が笑った。

こいしが寺に入って一週間ほど経ったある晩、私は玄関で飼犬の吠えるのを聞いた。玄関が開き、ぱたぱたと歩く足音を聞いた。まさかと思って廊下を覗いた時にこいしとばったり

出くわした。笑いながらこいしは仰々しく手を合わせてみせた。

「何で帰って来たの？」私も笑った。

「うちのお風呂に入りたくなくて」

それから私とこいしは二人で一緒に温泉に浸かった。そのうち猫と鳥も入って来て、一寸した騒ぎになった。こいしは変わらず動物達によく構った。揃って肩まで浸かって百まで数えた。身体を温めたこいしが、少しの患いもなく穏やかに眠れる事を私は望んでいた。〈了〉





深紅香奈

お目出たき娘

或る時、紅魔館の内にある姉の知人が管理している図書館に行き、アレクサンドル・デュマの『三銃士』という本を持ち出して無聊の慰みにした。自分には、名誉とか忠誠という代物は今一つ理解し難かったが、登場人物の關係性に惹かれ数度読み直した。この本を返す時に丁度姉が件の知人、パチュリーという魔女なのだが、図書館で談笑しながら紅茶と菓子を楽しんでいた。話題は良く聴き取れないが、何気ない日常の話の様であった。また特別の様にも思えた。特に姉は非常に楽しそうに頬を綻ばせている。自分は二人のいる処を過ぎる時に一寸何気なくそつちを見た。そうしてその時心の中で言った。

自分は友情に飢えている。

誠に自分は友情に飢えている。残念ながら気が置けない友情、美しい友情に飢えている。四百と九十五年もの間、姉とパチュリーと、幾らかの使用人以外との接触をしてこなかった自分は、友情に飢えている。自分は図書館を出ると、緋毛氈の廊下をせかせかと歩き、角に当たって右に折れ地下に続く階段を下って自室に向かった。

途中で館の妖精メイドの仲の良い一組が箒を杖に怠けて、楽しそうに雑談をしているのに

会った。自分は心私こころひそかに羨ましく思った。羨ましく思うよりも呪った。その気持ちは貧者が富者に対する気持ちと同じではないかと思った。自分が不満を感じていなかった四百九十五年の過去を、孤独であり崇高な研鑽であったと信じる時間に傷を付けるようで、呪わないではいけない。彼女らは自分に自分の淋しさを面のあたりに知らせる。痛切に感じさせる。

自分は彼女らを祝しようと思う、しかし面前に見るとややもすると呪いたくなる。

自分は友情に飢えているのだ。

自分は魔理沙のことを考えながら自室に帰った。

魔理沙は姉が起こした紅霧事件の際に屋敷に忍び込んだ、可愛らしい人間の魔法使いである。何か魔法研究の助けを探していたようで、私の地下室にまでやってきた。当時私は友情を育もうなどは考えていなかったが、魔理沙を面白い人間だとは思った。厳しい弾幕を頬に擦りながら見せる笑顔を可愛らしいと思った。事件後も姉やパチュリーを訪ねて館に来て、ちらと顔を見るたび暫く魔理沙のことばかりを思い浮かべていた。しかしすぐ忘れてしまっ

た。ところが友情を意識し始めた頃から、魔理沙のことを益々面白いと思い、可愛らしいと思ひ、暫く見ないでいると淋しいと思うようになった。

自分はその時分から魔理沙と親友になりたいと思うようになった。魔理沙ほど自分の親友に向く人はないように思われてきた。人里の名家の出でありながら一人で暮らす魔理沙と、夜の支配者を称する姉の元で暮らす自分は、家柄も良いと思った。魔理沙なら他の退屈な妖怪や食料である人間とも違うし、自分は魔理沙の研究の助けになると思った。何より、種族を超えた友情という関係が魅力的である。かくて自分の憧れている理想の親友として魔理沙は自分の目に映ずるようになった。

友情に飢えていた自分はここに対象を得た。今後魔理沙とするであろう語らいや、魔法の実験を思い浮かべて、日増しに魔理沙を慕う気持ちが強くなった。そうして魔理沙も自分を親友にすることが一番幸福なように思えてきた。

魔理沙と親友になるにあたり、自分はまず姉の了見を取り付けるよう努めた。痲癩を起こしたり、妖精メイドを殺めることなく、日々を過ごした。頻りに姉をお茶に誘ひ、自分が既

に相応の落ち着きを持つている様を見せた。姉も博麗神社の巫女と最近懇意にしていることもあっただろう、春が来る前には、姉に魔理沙と交友することを承知させた。併せてパチュリーや、他の館の面々にも承知させた。

自分は其処まで思ったより容易に事が進んだので、十が九まで上手く行くように思えた。それには自分の種族の方が、人間より万事に於いて優れているという自覚も手伝った。そうして自分は上手く行く暁を考えて、嬉しき夢と、甘き夢と、くすぐったい夢を見た。

間に立ってくれたのは館の使用人を纏める者で、咲夜といった人間が、魔理沙に紅魔館で暮らすよう提案してくれた。間に人を立てるのは一般でないとも思ったが、自分の求める友情には必要だった。自分から「友達になってください」と頼むほど、自分は恥知らずではない。また自然と仲良しの一人になるような、そんな薄ぺらい、品のない友情も求めていなかった。自分と言えば魔理沙であり、魔理沙と言えば自分の名が挙がるような、唯一無二でありたかった。それこそ友情だと思った。でなければ、館の妖精メイドに命令を下して遊びの相

手にするだろう。とはいえ、やはり何も無しでは関係を築くのは難しいから、まずは咲夜に間に立つてもらって「館で暮らしてはどうか。魔法の研究の役に立ち、物や人で困ることもなくなろう」ということを伝えてもらった。返事は直ぐ来たが、それは「楽しそうだが、私は限界が来るまでは自身の力を信じてみたい」というものだった。自分は酷く落胆した。

自分は友情に飢えていたから、魔理沙と直ぐに親友になりたかった。しかし魔理沙は、自分よりも遥かに幼く、御転婆の盛りである。世間も知らず、友情の尊さを知るには若すぎるかも知れない。であれば、自分は魔理沙が限界を見つかるまで待とうと思った。魔理沙の言う限界が何時来るのか分からないが、寿命を鑑みても時間は十分ある。魔理沙が自分の親友になることを選んだ時、血を与えて、ゆっくり友情を楽しめば良いと思った。その後も魔理沙は度々図書館を訪れたが、自分は顔を盗み見るだけで会わなかった。魔理沙の話は、そのままになっている。自分には望みがあるように思えるし、無いようにも思えた。

自分と魔理沙との関係はあらし以上のようなものだ。

自分はまだ所謂友情を知らない。物語の中で見ることはある。しかしそれは純粹の友情で

はなく独善である。自分は四百九十五年もの間他者と接触してこなかった。

自分は友情に飢えている。

自分は魔理沙の代わりに、他の誰かを親友にしようとは思わない。また薄ぺらい、上辺の、同調的な、或いは支配的な友情で慰めようとは思わない。自分は魔理沙がこの飢えを癒してくれると信じて疑わない。故に幾らでも待つことが出来ると思った。神が我と他を明確に分けたるは、理解を至上の徳として置くからに他ならない。肉体を求めるのが男女の仲であれば、精神の求めは親友の存在だろうと思った。しかもそれは、自分の引き写しの様な共感者や、都合の良い理解者であってはならない。『フォーリオアカインド四面的な自分』は同時刻には別の感情の様に見えるが、将来より顧みれば、畢竟一つの自分の重ね合わせに過ぎない。これは友情ではない。友情とは、即ち光学的に自分を観測することで、自分外存在を理解することである。即ち親友は或る時は実直に打ち返す反射光であるべきで、また或る時は錯雑に見方を変える屈折光たるべきだ。誠に、個にとって親友とは『カタデイオフトリックフレンド反射屈折的な友情』である。

親友は自分より弱いかも知れず、自分より愚かやも知れない。詰まらぬ事もあるかも知れ

ない。しかし親友の、自分に与える力は強い。

所謂友情を知らぬせいか。自分は理想の親友を崇拜する。そうして、その理想の親友として自分の知る中に於いて魔理沙は第一の人である。

魔理沙に幸あれ！

しかし自分は幾ら魔理沙を求めるからと言って、自分を捨ててまで魔理沙と親友になろうとは思わない。自分は魔理沙以上に自分を愛している。幾ら淋しくとも、この館での暮らしと四百九十五年にわたり続けた夢想の事業を投げうって魔理沙と誼を結ぼうとは思っていない。午餐の後の菓子を止めても、毛綿鴨のベッドを諦めてでも、魔理沙と親友になりたい。しかし自我を犠牲にして魔理沙と親友になりたいとは思わない。

友情に飢えて、友情の力を知り、友情の力を知って、自我の力を自分を知ることが出来た。自分は自我を発展させるためにも、魔理沙を要求するのである。

自分は返事を待っていたが、それが冬の終わりも近づくと雪割草の様に、愈々と魔理沙を



求める気持ちが強くなった。ある日に買い物に出た咲夜が「春の来ない異変が起きた様です」と漏らすのを聞くと、自分はこれを魔理沙と共に解決すべきだと思った。大きな問題に協力し立ち向かう姿は如何にも親友的である。自分は再度、咲夜に頼んで魔理沙の処に行つてもらおうと思つた。その時、咲夜は魔理沙を説得するのに無理をするかも知れない。また、失敗した時に自分に恨まれるのではと畏れるかも知れない。自分は其れを望まなかつた。魔理沙には自ら望んで親友となる道を選ぶのを欲していた。説得の末、数いる顔見知りの一人に迎えられることは望んでいなかった。自分の希望が叶わなかつた時にも、咲夜を恨む気はない。咲夜は自分の為に尽力してくれている。望みが叶わないのは自分が至らないか、魔理沙が自分と親友になる運命を察し得ぬが故である。自分は咲夜に、魔理沙が承知しなくても決して恨みを言わぬこと、咲夜の献身には感謝していることを伝え、魔理沙の元に行つてもらつた。咲夜が戻つた時、自分は息を切らして結果を尋ねたが、魔理沙はもう異変解決のために家を出た後だつた。自分は落胆したが、咲夜に魔理沙が一人で出たらしいことを聞くと、ほつとした。魔理沙は若さ故に、好奇心に誘われて飛び出したただけだ。別の誰か、親友と呼ぶ者

と異変解決に向かったのでは無かった。自分と一緒に行った方が良いということに、気が回らなかつただけだった。それで有れば自分は待とうと思った。魔理沙が落ち着くまで、何時までも待てば良いと考えた。

魔理沙に幸あれ！

待つていれば万事上手く行くような気がした。魔理沙は今、如何に異変を解決しているだろう。またその話を、親友となった暁には自分にどの様に語るだろう。その日の自分は魔理沙を夢に見た。

姉は少し自分と考えが違い妙に外聞を気にする節があつて、意見をすれば大抵はぶつかり議論になるのだが、それでも最後にはカラリと笑った。その姉が魔理沙の話をした。

「それで、貴女はまだ魔理沙には友達になりたいと言っていないのね」

「言っていないわ。友達になりたいと伝える友達なんて、それは関係性に対する冒涇よ。淋しさを誤魔化すために、上辺の友人を求める恥に私は耐えられない」

「貴女は昔から種族の運命に縛られぬ求道者だから、主張は分かるけれど。でも一度気軽に友人を作るといふ事も、悪くないと思うわ」

「それは御姉様がパチュリーという親友がありながら、最近には巫女や里の木端妖怪と付き合っていることを、私もなさいって意味かしら」

自分が目を細めたのを見て、姉は紅茶を口に含んだ。

「そうよ、良いじゃない。何人友達がいたって。親友の間柄も、一人じゃなくても良いでしょう。友達が多いことを悪いことだと思っているのかしら」

「浅薄に友人関係を求める者に私は同情するわ」

「羨ましく思っているでしょう」

「そうかも知れない。しかし同情もするわ。多くの友人を持つ者は、不要な関係性の鎖で何時か自我を絞め殺すの。御姉様が立場に縛られているように」

「そうとは限らないでしょう。鎖で遊ぶのも悪くないわ」

「そういう者こそ絞め殺されるのよ」

「絞め殺される者は、そいつが悪かっただけ。運命の扱いを間違えた本人のせいで、当然に死ぬべき者が死んだだけよ」

「そうだとしても、親友は可哀想よ。御姉様と巫女とを知ったら、彼女はもう思うかしら」  
「パチエもきつと、特別を求めないわ。私が新しい友達を作ることがあるように、彼女もまた新しい友達を作ればいい。第一、自分だけの親友として求められる様な人は、概して多くの人から友人と思われているものだよ。魅力的なもの」

「話が逸れてきたわ。要は魔理沙を私の親友に出来るかどうかよ」

「上手く行くといいわね。貴女のこと、応援しているわ」

「頑張るわ。でもいざ頑張ろうとすると、今まで友達を作ってこなかったから難儀するわね。それでも今までの生き方を悪かったとは思わないけれど」

「それも貴女の魅力の一つ。もし貴女の言う本物の友情があるのなら、それは貴女にこそ相応しい」

そうして姉と自分は、顔を見合わせて笑った。今は魔理沙のことは、姉と咲夜に任せてお

く他ない。自分は本分としての、やるべきことをしながら待つしかない。

勉強しよう。幸あれ！

自分は魔理沙を欲する気持ちを日増しに強くしながら、しかし会わないようにしていた。魔理沙を見て、自分の意志の弱さ故に安易に揺れてしまうことを恐れた。勿論、自分は大丈夫だろうと思った。律することは出来ると思った。それでも魔理沙に会わずに、咲夜が上手く話を纏めてくれるのを待っていた。

しかし一度だけ、図書館で本を借りようと歩いていた廊下で、魔理沙とパチュリーが話している処に会った。魔理沙は自分に背を向けていたので気付いていなかった。当然パチュリーは私に気付いたが、何も言わなかった。自分はそのまま歩いて魔理沙と接触して良いものを悩んだ。避けるのは間違っていると思った。過剰な意識と自分を笑った。しかし、魔理沙と話すのであれば、それは特別の時が良い。自分はずっと待った。今に魔理沙から返事が無ければ将来も待ち続ける。それを何の用意もなく、何の特別もなく、魔理沙と話すことが相

応しいだろうか。日本では四は縁起が悪い数字と聞く。今日は十四日だった。自分は縁起なご歯牙にも掛けない。魔理沙はどうだろうか。やはり気にしない気がする。それでも、今までと我慢してきたのに、態々と縁起の悪い日を選ぶこともない。今までの我慢が、僅かな瑕疵で急に無価値になるような気がしないでもない。自分は手近くあった扉に手を掛ける中に逃げ込んだ。扉が開く音に気付いてか、一瞬魔理沙が自分を見たような気がした。魔理沙は魅力的だった。

扉の奥で、自分はこの壁の向こうに魔理沙がいることを感じた。魔理沙は自分を見ただろう。今パチュリーと自分のことを話しているだろうか。変に思われていないだろうか。周りも見て、ここが妖精メイド達の休憩室だと気付いた。魔理沙はどう思うだろうか。菓子を盗むぐらいに思えば良いが。扉の向こうで魔理沙がどんな顔をしているか気になった。そうして扉をゆっくり開けて何食わぬ顔で左右を見たが、魔理沙もパチュリーも既にいなかった。自分は図書館には寄らず、自分の部屋に走った。

部屋に戻ると、先の自分の行為は少し恥ずかしいものに思えた。自分は魔理沙を見ても慌

ててはいけない。魔理沙を親友に出来ずとも、自分を失ってはいけない。友情の甘いを享受出来ずとも、自分の心を荒まずにみせる。自分は全てを超越しなければならぬ。勇士、自分は勇士だ！

こう心に叫んだ。そうしてややもすれば吸血鬼らしい残虐が心に流れ込むのを防いだ。

まだ暫く、魔理沙を待った。夏も近づく頃に咲夜が状況を教えてくれた。「幸あれ！」と心に祈りながら聞いたが、咲夜の報告は「彼女は交流が広く、なかなか誰か一人にとは行きません。妹様の名前も出せませんし、変に拗れるよりかは。他の方法で骨折る心算ですが、時を待つ他ないかと」と伝えるきりだった。それっきりだったのだ。

自分は全身に力を入れた。自分は勇士であると鼓舞したが、涙が出てくる。もう駄目になったのだ。希望はないのだと思えてくる。自分は魔理沙と親友になりたい、親友になるべきだと思つた。そうしてその裏には、魔理沙の為にもそれが良いことだと思つていた。馬鹿だ、かくまで己惚れる自分は馬鹿に違いない。

だから自分は今、苦しんでいる。魔理沙が親友になるべき人なら、もう少し自分に気を遣ってくれても良からう。魔理沙はきつと何とも思っていないのだ。魔理沙が何とも思っていないのであれば、自分は魔理沙を親友にすることを求めない。自分はそれ程、お目出たい娘にはなりたくない。魔理沙は自分の親友に相応しい相手ではなかったのだ。

しかし、もしかしたら魔理沙は自分のことを知らぬかも知れない。自分が魔理沙のことを親友にしたいと思っていて、魔理沙も自分を親友にしたいと思っているのに、それを知らないから他人の親友になるのは不幸だ。或いは自分に応じる自信がない故に、魔理沙が口を噤んでいるのは不幸だ。魔理沙の心が見たい。

自分には、魔理沙がこの憐れな人間のようにも思えて、思い切れない。魔理沙が自分のことを何とも思っていないのなら、思い切って見せる。それが分からぬうちは、思い切らぬ方が良いでしょう。もう少しだけ、待とうかと思った。

幸あれ！ 一人に幸あれ！



そうして、今度は夜が明けぬ異変があつて、姉と咲夜はそれを解決しに行くと言つた。他にも博麗の巫女も相手を見つけて解決に行くらしい。自分は咲夜に、魔理沙が自分と異変解決に行くよう頼んで欲しいと伝えた。咲夜は「その事ですが、既に魔理沙には妹様と一緒にはどうか」と声を掛けてみたのです」と言つた。自分の胸は躍つた。咲夜を急かした。そうして、魔理沙の返事を聞いた。自分は全身に力を入れた。目から涙を流した。

魔理沙は親友を作つたのだ。

自分は耐えよう、耐えようとしたが、耐えかねて声を出して泣いた。どうして良いかわからない。自分は夢中で廊下を走つて、自室に籠つて声を上げて泣いた。

魔理沙は魔法の森に住む人形遣いで、アリスという人と異変解決に行った。

自分は魔理沙のことを、空想の部屋から記憶の部屋に移そうと努めた。しかしそれは虚しい努力だった。時間の手に任せるより仕方ない。友情に飢えている自分は、また別の相手に友情を求めるかも知れない。今回のことを祝するかも知れない。しかし今はまだ、自分はそ

んな考えは何にもならない。自分はパチュリーに、アリスという人のことを聞いた。パチュリーは人形遣いも魔女仲間として「立派な魔女よ。それがどうしたのかしら」と言った。自分は「ちよつとね」と訳の分からぬことを言った。

その後暫くして自分は、魔理沙は自分のことを大切に思っていたが、魔法使い同士の繋がりから他の人の親友になったのだと、理由もなく思うようになった。そうして今は、魔理沙を憐れむようになった。

自分は何時か、この感覚が誤っているか魔理沙に直接聞きたいと思っている。しかし魔理沙が「おまえ一人を親友にと願ったことはない」と言おうとも、自分はそれは口だけだ、少なくとも魔理沙の意識だけだと思うに違いない。

了

付録『無邪気万歳』

不思議な羽をした吸血鬼が、ペンを持って何かを書いている。

その背後に隙間が口を開いて、中から二人の女性が見ている。

甲は少女趣味の傘を持ち、乙は狐耳と九本の尾がある。それ以外は不明。

甲、幸福を夢に見ている。

乙、「幸あれ」と書いていますね。

甲、親友となることが幸福か、彼女は知らぬでしょう。

乙、知らぬから書けるのでしょね。

甲、邪気なく信ずるから書けるのでしょね。

乙、親友は一人限りの様に書いていますね。

甲、魔理沙の他に相手は無い様にも書いています。

乙、後に古明地という娘に会って親友になることを知らぬから、書けるのでしょね。

甲、今が全と思うことは穢れなきことです。

乙、その後に鶴と知り合い、己の嫌った多人数の友情を結ぶを、如何に感じるでしょう。

甲、悪気なく、姉の考えたことに倣うでしょう。

乙、それが今度は饕餮と意気投合すると知ったら。

甲、その時はきつと、無邪気に喜ぶでしょう。

乙、聊か狡い気もしますが、これで彼女自身には何の罪の意識も無いのですよね。

甲、邪気が無いのだから咎めません。

乙、邪気が無いというのは、お目出たいものですな。

甲、無邪気であることを彼女の為に祝しましょう。

甲乙、無邪気万歳！

吸血鬼はペンを置きて立ち上がり

吸血鬼、幻想郷を管理する者があれば、運命の通り二人を幸せにしてください！

甲乙互いに見交わす。

〈了〉

久我暁

白蓮の弟子たち

魔界に封印された師の聖白蓮を解放するため、地底を出奔した村紗水蜜と雲居一輪。そこに、寅丸星の名代としてナズーリンが加わり、飛倉の破片を探し求め、三人は当て所なく幻想郷を彷徨い続けていた。折しも、冬の寒気が強まる頃であり、しんしんと降り続ける雪のために、眼下に聳える妖怪の山は、真っ白に雪化粧した姿を見せていた。ナズーリンは、部下の子ネズミたちが凍えている姿を見ると、今日の探索は打ち切って、戻れるならば聖輦船に、それが無理ならばどこかこの寒さをしのげる場所へ向かいたいと思っていた。勿論、水蜜も一輪も寒さを感じていないわけではない。それでも、師を救いたいという愚直な思いが、彼女たち二人の探索行を支えていた。そんな二人の後ろを飛びながら、ナズーリンはどことなく冷めた心持ちになってしまふ。そもそも、白蓮解放の使命に燃える二人とは異なり、ナズーリンは聖白蓮の直系の弟子ではない。あくまで星の代理なのだ。その上、飛倉の破片を集めれば白蓮を解放できると単純に信じ切っている二人の愚かさが滑稽に思える。勿論、飛倉の破片が白蓮を解放に必要なのは言うまでもない。だが、それだけでは無理なのだ。毘沙門天の代理人たる寅丸星が所持していたはずの宝塔が必要なのである。しかし、現在その宝塔

の行方までもようとして知らなかった。愚かにも宝塔を紛失した主人の代わりに、この探索行に加わっていることは、当然のごとく二人には内緒にしてある。

「やはり、船を動かした方が良かったんじゃないか？ ムラサ船長」

船幽霊のくせしてブルブルと肩を震わしている水蜜に、いい加減痺れを切らしたナズーリンがため息交じりに声をかける。

「それはやむを得ない判断だったと、貴方も分かっているでしょう。ナズーリン？」

「ああ、それは分かっているさ。全く当てもなく船を出して、人間に警戒されてはいけない。

それには納得しているよ」

水蜜の代わりに返答した一輪に向かって、ナズーリンは大げさに首を横に振った。

「ただね、如何せん寒すぎるんだ。見てくれないか、私のネズミたちを」

そう言って子ネズミたちの入った籠を、二人に見えるように掲げる。

「その子たちもずいぶん寒そうにしているね。かくいう私も流石に寒い！」

「幽霊なのに、寒さを感じるのね。でも、探索役のネズミたちがその様子だと……、今日は

これ以上は難しいかも知れないわね」

悔しそうに唇を噛む一輪。しかし、寒がっているくせに水蜜の方が聞き分けが悪かった。

「ただ何も収穫なしにまた帰るというのも、ちよつと癪なんだよねー。ずつと思つてたんだけどさ、君のお得意のダウジングで、ほいほいつと見つからないのかい？」

あつけらかんとした口調だが、やや棘のある水蜜の言葉だった。

「簡単に言つてくれるね……。それができれば苦労はしないよ」

ナズーリンは内心舌を出しながら、村紗の問いに答える。実際は本気で探していないのだから見つかるはずはない。飛倉の破片の前に、まずは宝塔を見つけること。彼女にとっての優先順位は当にそれだった。

「ナズーリンも頑張っているのだから、それ以上責めても仕方ないわよ」

「まあ、そうだねー。でもどうする？ 今日には船に戻るうか」

「それが良いかもしれないわね。でも、ちよつと吹雪いてきたわね……」

一輪の声が呼び水になったわけではないだろうが、先ほどまではチラチラくらいだった雪



が、勢いを増しはじめていた。横殴りの雪が彼女たちの顔を打ち付け、視界が白一色になってしまふほどだった。

「ちよつと、ちよつと、ほんとにやばくない？ 一旦下に降りようよ」

「そうね、ちよつと良い所に木陰もあるし、そこで吹雪が弱まるまで休むことにしましょう」  
——吹雪を避けて降り立った所には、鬱蒼とした木々が立ち並ぶ中、ひっそりと目立たぬように屋敷が建っていた。妖怪の山の山中、九天の滝を臨むような形で高樓があり、秋波館という屋号が掲げられている。

「ふうむ……」と、ナズーリンが少し考え込むように腕を組むと、「どうだろうか、ここで寒さをしのがせてもらおうというのは？」

「しかし、秋波館とは流石にあまりではないか？」

「えー、波って良くない？ 海がないこの土地で久々に聞けて、ちよつと私はうれしいかな」と。一輪の言葉に耳を貸すことなく、水蜜はナズーリンの言葉に賛同するだけでなく、すでに玄関先に立って、中に呼びかけてしまっていた。

応対役として出てきたのは、若く美しいが暗い表情をした娘だった。紅の着物に金色の御髪、秋の紅葉を思わせる雅やかな美女なのだが、どこか陰がある。あまりの暗さに水蜜は思わず声をかけられず、その代わりにナズーリンがかしこまった様子で、

「申し訳ないけど、私たちは雪に降りこめられ、どうにもこうにもならなくなってしまった旅の者だ。一夜の宿をお願いしたいが、どうだろうか？」などと改まった挨拶をした。

すると、娘の方は、なるほどと頷くと、不思議な三人組を怪しいとも思わないで、今晚は知り合いの者たちが酒宴をしており、妹を初め一同酔っ払っているから、何のお世話もできないが、それで良いのならお泊まりください、と言ったのである。そう言われてみると、応対した娘の顔もどことなく朱に染まっている。こんな風に娘の口から、「一同酔っ払っている」と聞くと、酒に目がない一輪は、それまでの警戒を解いて、「思わず私も参加できないかしら」と言いかけそうになるのを、「——そんな宴の中にご迷惑をおかけするが、よろしく頼みます」と謝して、玄関の中に入ったときは打って変わり、娘のあとについて、さっさと家の中へ進み始めるのだった。

「やれやれ、一輪の酒好きは相変わらずだね」

「でも、反対されなくなったから、良かったよ」

もとよりこの屋敷で寒さをしのぐことに反対はないのである。一輪の変わりように擦られるような顔を見合せて、水蜜とナズーリンの二人はすぐ後を追った。通された部屋は来客用の座敷であるらしく、掃除の行き届いた小綺麗な部屋である。その一方で、奥の広間の方からは、艶めかしい笑い声や管絃の響きが、如何にも逸楽に誘うかのように聞こえてくる。

「一輪、君は参加したいんじゃないかな？」

今にも酒席に飛び込んでいきそうな一輪に釘を刺すようにナズーリンは声をかける。

「いやはや、そんな風に思われてしまうのは、私の不徳のいたす所ね」

「わざわざ行かなくても良いじゃない。こんなにごちそうを用意してくれたんだから」

水蜜の言うように彼女たちの前には、美酒佳肴が並んでいた。それどころか、接待役として酒宴の席から人を割いて、もてなしてきたのである。そうして、三者共にお酒が行き渡ってしまえば、流石の冷静なナズーリンでさえも、羽目が外れてしまう。ましてや、美酒に目

がない一輪や、調子の良い水蜜などは言うまでもない。調子に乗って自らの武勇伝を語り始めるのだった。そんな水蜜のそばには、玄関で応対している娘がびったりとくっついていた。「水蜜様——」と、気がつけば名前で呼ぶようになっていた娘は、「——よろしければ、もっと静かな場所でお話を……」と水蜜の手を取る。

「いいよ」と、水蜜は勢いよく立ち上がり、連れだって部屋を出て行ってしまふ。美味しいチーズや、旨い酒に心を奪われている二人は、気にもしない様子で接待係からの歓待を受け続けていた。しかし、半刻以上の時間が過ぎても、水蜜が戻ってくることはなかった。

「ナズーリン、村紗が戻らないのだけど、どうしましようか」と、流石に一輪が気がかりになったのだろうか、心配そうに相談をするのだった。それでも杯を手放してはいないので、どうしても深刻さは欠けたように見えてしまふ。

「……はあ、まったく船長は」と案じ顔を浮かべると、部下の子ネズミたちを呼び寄せて、密かに屋敷内を探らせた。

暫くして戻ってきた子ネズミの報告を聞き、ナズーリンは頭を抱えるしかなかった。水蜜

は、屋敷の閨にて応対をしてくれた娘と、その妹に挟まれて、だらしのない表情で喋々喃々しているようだった。

「一輪、あの阿呆船長をどうしてくれようか？ 船幽霊で人を溺れさせるのが仕事だというのに、自分が溺れさせられては話にならない……」

報告を受けたナズーリンは頭を抱えて一輪の方を向けば、かわいらしい側仕えの女にお酌をされて、満更でもない様子だった。

「尼さんが酒なんて飲んで楽しそうにしている良いのかね？」と、嫌みの一つも言いたくなくてしまふ。

「……そうね、五戒では、飲んではならないということになっているわね」

「だったら——」

「——でもね、仏様はこうおっしゃっているわ『飲酒を行ってはならぬ、酒はついに人を狂酔せしめ、諸々の愚者は酔のために悪事を行い、また他の人をして怠惰ならしめ、悪事をなさせる。この禍いの起こるもとを回避せよ』ってね。要するに酒に酔って、悪いことをする

から酒を飲むなって言っているのよ。だから、酒を飲んでも酔わなければ良いはずよ」

一息で長広舌を振るった一輪の顔は薄桃色に上気しており、誰が見ても酔っているのが分かる。そんな姿に一つため息を吐くと、ナズーリンは再度問い直した。

「で、船長のことはどうするんだ？」

語気の強さに、一輪も居住まいを正して答える。

「そうね、流石に好きにさせるわけには……」

「ネズミたちに脅かせても良いけど？」

「そうね、むしろ雲山に——」

水蜜に懲罰をくれてやろうと、一輪とナズーリンが穏やかでない話をしているときだった。側仕えの女の一人が、すすっと近づいてくると、「ささ、一輪様もお飲みになって」と媚びを売りながら、次から次へと話している横からお酌をしてくる。まるで蟒蛇のように飲み続けていた一輪だったが、いつの間にか側仕えの女の一人と姿を消してしまっていた。

気づけば独り宴席に取り残され、どうしたものかと思案しているナズーリンの耳元に「こ

ちらにおいでなさい」と聞き覚えのある声がする。「えっ？ ご主人？」ここにいるはずのない寅丸星に呼ばれ、驚きのあまり立ち上がった瞬間、ナズーリンは見えない手に抱きすくめられ、そのまま意識を失ってしまふのだった。

——かくして、その夜、彼女たちは揃って破戒僧と相成ったのである。

翌る日、まだ夜が明けきらぬうちに、方々の体で屋敷から抜け出てきた一輪は、九天の滝の淵で水瀑を呆然と眺めつつ、「それにしても昨晚の体たらくは……、まったくの失態だった」と考えるだけで、一輪は宿酔の気怠さが増してくるような気がしていた。

「それにしても、過ぎたことですね……。悔やんでも仕方ありません」

雲山の拳で目の前の水を碎き、滝の奥に流れる水で顔を洗う。指が痛みそうなほどの冷たさが今は心地よかった。

——ほどなくしてナズーリンが水蜜を引きずるようにしてやってきた。

「やれやれ……、今の今まで何をやっていましたのです」

未だふぬけ切っている水蜜に、一輪は厳しい調子で活を入れようとす。

「何だか聖のような物言いをするね、一輪。——何をもって、貴女たちこそ、せっかく朝ご飯まで用意してくれていたのに、わざわざ暗いうちに逃げなくても良いんじゃない？」

「はあ、まったく……、そこに座りなさい、村紗。——確かに昨晩のことは、我々一同姐さんに合わせる顔がないほどの失態よ。皆同罪なのだから、これ以上は責め立てはしないわよ、でも、少しは反省つてもものがないのかしら？」

「そりゃあ、聖に合わせる顔がないっていうのは、まあ、そうだけどさ。だからといって、一宿一飯の恩義がある相手から、こそこそ逃げ出すつてのは違うんじゃないのかしら？」

「ナズーリンに引つ張られてきておきながら、よくもまあそのようなことが言えますね。まあ、それはそうと、今日は貴重な冬日和なのだから、飛倉の破片を探すのにちようど良い。できれば迷いの竹林の方まで足を伸ばしたい所よ。だから、早速ここを発ちましょう」

「そうだね、今日は季候も良いから、私のネズミたちもしっかり働いてくれるだろう」と、ナズーリンは愛用のダウジングロッドを構えながら立ち上がった。一輪も先ほどまでの宿酔が嘘のように、晴れ晴れとした表情になっていた。



「では、行くとしましょう」

「えっ、ちょ、ちよつと待ちなさいよ」

いつもの明るい様子とは異なり、水蜜はどこか元気がなく、しおれたような様子で、セーラー服の大きな襟を弄っている。

「もちろん聖のために飛倉の破片を探すのは大事だよ。でも、貴女たちは、昨晚の……あの館の者たちに挨拶もなしにここを離れる気なの？」

「えっ？ どうしたのよ村紗。私たちにとって一番大事なのは、姐さんを解放することでしょう？ 物見遊山の旅ではないのだから、あんな退廃の巣窟に戻る必要はないでしょう？」

血相を変えた一輪に、村紗は怯むことなく反駁する。少し前までの悄然とした気配とは打って変わってである。

「退廃の巣窟？ 貴女は本気でそんなことを思っているの、一輪？」

「それはそうじゃないの。あれが退廃的でないとしたら、一体何をそう言うのかしら」

さも馬鹿にした物言いをする一輪に、唇の端をきゅつとつり上げると水蜜が反駁する。

「五戒を顧みない尼さんなのに、よくもまあ退廃なんて口にできるね。でも、そうだとしても、恩を受けたのは事実じゃない？ それに感謝を見せないで、本当に聖の理想を叶えることはできるのかな」

「理想って、何を突然言い出すのよ。墮落した生活を姐さんが喜ぶとでも？」  
相も変わらずの一輪の物言いに、水蜜は大きくかぶりを振った。

「誰かを見下げた態度を取る。それは『全ての者を平等に救う』っていう聖の考えに反するとは思わないのか！」

「思わないわよ！」

まさに場は一触即発。水蜜のそばにはいつの間にか大錨が。それに対する一輪の後ろには、運算の巨大な拳が構えられていた。その重圧感、まさに氷瀑が破裂しそうなほどであった。だが、そこに静かだが鮮烈な雷が落ちる。

「きみたちはじつにはかだな」

ナズーリンはどこまでも見下げ果てた様子で一輪と水蜜を睨めつけた。あまりにも強い侮

蔑をかけられ、それまで激しく言い合っていた二人は、冷や水を浴びせられたように、静まりかえってしまった。

「聖の『真意』などという凡俗に分かるはずのないものを言い争ってなんになる。それは、あくまで君たちが聞いた聖の『言葉』から推察しただけのものだろう？ だから、一つしかない『言葉』から無数の『真意』が生まれてしまう。折り合いの付かない『真意』をぶつけ合ったところで、何も生まれやしないよ。だから、私は君たちを『馬鹿』だと評させてもらったわけだ」

ナズーリンの長広舌に、水蜜が小さく口笛を吹く。

「ちよつと驚いたよ、君がそんなことを考えていたなんてね」

「そうかい？」

「そうだよ。だって君は聖の解放にそもそも興味を持っていないだろう？ だからいつだって他人事のような振る舞いを見せることができるんじゃない？」

水蜜の瞳がギラリと光る。勿論一輪も険しい表情でナズーリンをじっと見つめている。隙

さえあれば雲山の一撃が飛んできてもおかしくない。そんな殺気を感じる雰囲気だった。

「そうだね——」と、あっさりと言を縦に振ってから、間髪を入れずにナズーリンは続ける。

「——でも、果たしたいとは思っているよ」

「どういうことよ」、納得がいかないという風に一輪が不審そうな視線を強める。

「いや、まさに他人事だからだよ。実際の所、聖の弟子はご主人様であって、私はそうではない。強いて言うならば、毘沙門天様の弟子、かな。だから、この探索行に対して熱心でないと行われればそれはそうかも知れない。だからといって、私が聖の解放を望んでいないわけではないよ。それはご主人様の宿願でもあるからね。ただ、飛倉の破片集めだけを愚直に行う君たちを見ていると……、少しばかり苛立ちはするね」

淡々としたナズーリンの語りが続いている。

「飛倉の破片が集まれば、聖輦船が、私の船が完璧になる。そうすれば魔界にだって行けるんだから当然じゃない」

自信たっぷり口を挟む水蜜を一瞥するとナズーリンは鼻を鳴らした。

「そうだね、行くことはできる。でもどうやって封印を解くつもり？ ご自慢の船で体当たりでもするつもりかい。言っておくけどそれはやめておいた方がよい。せっかく復活した船が壊れるのを流石に見たくはない」

「ではどうすれば良いというの？」

結論を言わないナズーリンに対して、痺れを切らしたように一輪が問う。しかし、そこには先ほどまでの熱は見られない。流石に冷静さを取り戻し始めたようだった。

「もう一つ、聖解放のためには必要なものがある。今はそれが何かを語ることはできないが、きつと来たるべき日には君たちの元にそれを届けよう。それが私がご主人から託された使命だから」

「寅丸さんの——」

「——使命……」

一輪も水蜜もナズーリンの言葉に全て納得したわけではなかった。それでも毘沙門天の代理人であり、聖からの信頼の厚かった寅丸星の名前は確かに、彼女たちに妥結をさせるのに

は十分であった。

「仕方ないわね、今日は私が折れることにするわ」

諦めたように一輪が肩を落とす。それを見て嬉しそうに、「じゃあ行きますか」と、水蜜は小さな船長帽を被り直し居住まいを正す。いつの間にか取り出した木杓子で、自分の肩をポンポンと叩くのだった。

ナズーリンは、「では、一足先に行ってくれないか？ 私はご主人から頼まれた仕事を果たさねばならないのだ。なあに、心配はいらないよ。私はすぐ後から追いつくから」

そう言つて、水蜜と一輪に背を向けた。

「大丈夫？」

「私たちはお互いに指図をし合うような者じゃない。ナズーリンの自由にさせてあげようじゃない」

「私たちは村紗の言うように、館の者たちに一言挨拶してから、今日は迷いの竹林の方に行きましようか」

やれやれと肩をすくめながらも、一輪は水蜜の言に従うことにしたようだった。

「一輪……」

「では、行ってらっしゃい」

「後刻——」

ナズーリンは人里へ、水蜜と一輪とは共に屋敷の方へ足を向けるのだった。〈了〉





高坂流  
城之崎にて

巫女に殴り倒されて怪我をした古明地こいしは、温泉を訪れていた。温泉と言っても地底、旧地獄である。地獄であるからこそ、魂たちは幾らでもあっても鬼や獄卒の変わり者くらいしかいないことも事実。そう言った連中が温泉を管理しているらしいということは聞いているけれど、こいしにとってはそれも少し大きめの障害物以外の何者でもなかった。

「おういおうい」

そこらを歩いている鬼に声を上げてもこいしには誰も気付かない。それは分かっていたし分かられていたけれど、結局そういった妖怪であるからこそ、同じ妖怪にすら気付かれたりしない。それもどれも当たり前のようにこいしの前にある日常だった。

「ま、いつか」

ふよふよと何時ものように漂いながら——歩いているとも浮いているともどちらともとれない歩き方をしながら、こいしは大路を歩いて行く。どこにいたとしても、意識の範囲外に無いと気付かないし気付けない。彼女はそういう存在だ。それこそ、今ももうどこをほつき歩いていたとしても誰も気に留めない。

鬼が魂を捕らえているのがこいしの目に見えた。どうも、箱に収めて橋から落として沈めるらしい。魂はどこから来たかは分からないけれど、それでも状況を飲み込んでいるのか飲み込んでいないのかもわからない様子だ。今から死ぬというのに気付かないその滑稽さは、こいしに取っては若干の感情のざわめきを感じさせた。

「そっか、あの子は今から死ぬんだね」

正確には違う。もうあの亡霊たちは一度は確実に死んでいる。肉体を失った存在が引き寄せられるのがこの場だ。最終的に輪廻に帰るはずがここにいるということは、成仏がされないことを示してもいる。

魂が死んだならば、何が残されるのか。何も残らないとすれば、何を以て消えたのか、こいしにはわからない。けれど、鬼に捕らえられた魂はどこかに逃げだそうと必死に動いていた。けれど、その魂はもう檻の中から抜けられない。もがいたところで魂が閉じ込められる檻はとつとつにそれを逃がさないままだ。

こいしがじっと見つめっていると、檻の中に入った魂が、そのまま橋の下に落とされた。旧地底に流れる川の流れに、魂が溶かされていく。声なき悲鳴を魂が上げたように見えたけれど、こいしには何も伝わってこなかった。心を読める姉だったら少しは違うのだろうけれど、こいしは第三の瞳を閉ざしているからこそ何も見えないし聞こえない。

ただ、消えていくことだけが理解できている。鬼が檻を引き上げた。その中にはもう何も入っていない。残骸も残らない死の後の先へと魂が流れていったのだろう。こいしはそれ以上は分からないけれど、それで良かった。

ふと歩いている間に見えた魂が、消えかかっているのが見えた。もしかしたらこの魂も先ほど見かけたもののように騒がしくしていたのかもしれない。けれど、弱々しい光を発しているその魂が今はまだ嫌だ、とでも言わんばかりに漂おうとしていた。けれど、それはもう宙に浮かぶこともできず、ただ喘いでいるようにも見えた。

他の魂は、消えかかっている弱々しい魂になんて気がつかない。周りを歩いている鬼だっ

て当たり前だが気付かない。それに気を向けているのはこいしだけだ。こいしは意識なんてしていないし、考えてもいけないけれどただ消えかかっている魂を観測している。

「君、消えるんだね」

魂がこいしのことを理解しているとも認識しているともこいし自身にも思えない。そもそも普段から存在感がない——表現として非常に間違っているのだが、そもそも気がつくことができない相手として捉えた場合には存在感がない、という表現が一番適切だろう。声を掛けたけれど、その魂が気付いた時には消え去っていた。

あの魂はどこへ行くのだろうか。こいしには何も想像ができないし、何も知らなかった。ただ、消えていったことだけが理解できた。悲しさや寂しさのようなものは一切感じない。当たり前だ。覚り妖怪なだけならまだしも瞳を閉じた彼女にそんなものを感じる余地は残されてはいない。

ただ、消えるという現象でしかない。けれど、それをただ観察していたこいしにとっては不思議な感覚が残されていた。それが何なのかということをこいしは言葉にできないし、し

たところできっと誰も聞いていない。けれど、その何かが彼女の中にあるものを表そうとしていたけれど、それが何かは分からなかった。

ずいぶん昔——と言っててももう百年以上前のことになるが、こいしはひよんなことから人里から追放された人間を殺して食ったことがある。もつとも、そのことに気付いた人間は居ない。当時の巫女も気がつかなかった。別に美味くはなかったし、好き好んで食べるようなものだとはい片も思えない。ただ確実に言えることは、食べる直前には人間は怯え狂っていたことだ。

身体が刻まれて、血を流して、命の雫がこぼれ落ちていく。人里から追放されたということはそれなりのことをしでかしたからそうなったのだろうけれど、こいしにとっては大して関係がない。たまたま見かけたから食うための下処理をただけだった。

どのみち、こいしが食わなかったとしても他の人妖なり野犬なりが襲って食っていただろう。だからそのことについてはとやかく責められるものでもない。他の人妖と比べてもこい

しは人を食わない方だろうから危険性もあるわけではない。

そもそも、覚り妖怪は元々人の心を読むことで発生する恐怖を食い、そのついでに身体も食っているだけだった。そう考えればあくまでおまけ程度にしか過ぎないし、もっと言ってしまうと人間の血肉は不味かった。

もともと、追放されるような生活をしてきた相手だからだろうか。とにかく不味い酒を雑中に吸わせて口に一杯に詰め込んだような肉の味に気分が悪くなってそのまま捨ててしまった。もっと良い肉を食べよう、と考えて人里の元に赴くつもりにはならなかった。

ともあれ、そんな有様でも姉も特に何も言わなかった。ペットからもこいしは適当な扱いしかされていない——というよりも、気付かれてすらいらないなんてこともざらだ。

能力を制御できていないなどということでもないし、気がついた時には確かに側にいたりもする。でも、普段は気付かれないし気付けない。それがこいしだ。

もつとも、こいし自身もきつと気がついていない。彼女が気がついた時に何か変わったことが起きていたとしても気付かなかつたりもする。

ともあれ、こいしにとって消えていく魂に目を向けるなんてことは珍しい事象だったと言えるだろう。こいしの主観にとっては少なくとも、そうだ。

「やっぱり巫女を相手にしたからかなあ」

調子が悪くなったのはどうもそこからだ。空を飛ぶ紅白に目を付けられて何となく殴り返したらこれだ。調伏だの討伐だのもかくやというほどの拷問めいた圧力でこいしを吹き飛ばそうとしていった。

弾幕を撃ちあっている間……いや、敵対している間と言って良いだろうか、翻弄する巫女へと何度攻撃を繰り返しても当たらない。懐に入りこまれたら吹き飛ばしたとしてもまた接近される。意識の果てから外してもその間耐えきられる。ともかく、そんな有様でマトモに戦いたいなどはあまり思わない。

「巫女も悪い人じゃないんだけどね」

悪い人じゃないから関わりたくない、そういう話でもある。悪い人なら最悪殺してペットの火車に死体を運ばせればいい。当人がある種の善性に従っているからなお始末が悪いのだ。



そもそも、こいしにとっては別に相手が善人だろうと悪人だろうとどうでもいい。善人と呼ばれる人だろうと誰かを切り捨てることもあるだろうし、悪人と呼ばれる人だろうと自分の子供くらいは庇って死ぬだろう。そんなものは、ただの客観的な物事に対する主観にすぎないことだ。

巫女に折檻されて背中をこれでもかとはかりに叩かれた。病気や怪我になったところで大した影響もないこいしにとっては珍しく堪えたし、もしかしたら消えるかもしれないと感じたほどには手強い相手だった。

が……結局こいしは生きている。こんなことをどう示せばいいのか分からなかった。ただ、生きているから痛いのは変わらない。

「もう少しのんびり休めばいいかなあ」

ほんやりと呟いてこいしは地底を漂う。消える魂に意識を傾ける必要なんてどこにもないけれど、ただその無意識に従うままにこいしは誰のも目を止められることなく漂っていた。

心を食っていたときのことを思い出そうとしたけれど、こいしは何も思い出せなかった。それはきつと意識の下の元にあるからであり、こいしが無意識なままである限りはきつとどうしようもないことだろう。生きていけばそれはそれで忘れることもあるだろうし、こいしにとってはどうでもいいこととしか言えない。

逆にこいしも昔のことを姉から言われても困る方が多い。姉ばかり意味が分からない形で勝手に考えごとをしているのだ。どうせ読めないものを勝手に想像したところで何も帰ってこないのに不思議なものだし、そもそも考える意味がないものを延々考えても意味がないだろうとは感じる。

とはいえ、あの姉が——さとりが、こいしを見て溜息を吐くことも呆れた目線を向けることも慣れてしまった。そもそも、意識として留めることすらないだろうしこいしがここにいることも別に知らないだろう。

良い表現をすれば放任、悪い表現をすれば完全放置。どちらでもこいしにとっては変わらなかつた。それはこいしの主観からしてもどうでもいいことだし、実際に両方の側面が入り

交じっているからだと理解もしている。そもそも姉からすれば、瞳を閉ざした覚り妖怪——こいしのような存在は異物以外の何者でもないだろう。

逆に言えば、こいしは別に居ても居なくてもどちらでもいい存在でもある。特に仕事を任されるでもなし、手元の仕事を覗き込んだところで理解なんてできるわけでもなし。他の人妖の邪魔をしたりちよっかいを出したりはできても、その程度なら妖精だつてできること。

巡回、とか、見回り、とか。そういった適当な表現をつけてうろうろしている地底の空気は、こいしにも良くあつていた。今いる温泉の付近もそうだ。もともと、この温泉は温泉で鬼や人妖が集まって博打を打ったり酒を飲んだりしている。

ふと見やると、魂を捕まえた子供の鬼が何人かで騒いでいた。こいしが覗き込んだ先では、粗末な紐に繋がれた魂が魂とぶつかりあっている。その紐を握っているのは青鬼と赤鬼の子供。どうも土俵から押し出すか飲み込むかで勝負が決まるらしい。やれ、それ、いけと子供たちが騒いでいる。地上とかで言うところの虫を捕まえて戦わせる決闘を魂でやっているようだ。きつと人の霊魂だろう。

ぱち、ぱちと火が爆ぜるような音を立てて靈魂がぶつかりあった。どのみちこんな状態では感覚なんてものもないし、こんな所に落ちてくる魂は生前からロクなことをしていない。ましてやそれが虫や畜生ならまだしも人間であるならなおのこと。

ぱちん、と大きな音を立てて魂が衝突して双方に離れた。青鬼の子供が握る魂が劣勢なのか、輝きを発することもせずにはふるふるしている。

「ほら、もつと頑張れ」

青鬼の子供が魂を振り回してもう一度ぶつけようとする。もう一度魂が大きな音を立ててぱちんと弾けて——青鬼の子が握っていた先で、魂が消滅した。

「あーあ、もうおしまいなあ」

「俺が捕まえたヤツの方が強いからなあ」

まるで楽しんでいたものが終わってしまった、とでも言うかのように青鬼の子供が腕を組んだ。赤鬼の子供の紐の先の魂も消滅寸前と言った有様だが、辛うじて持ち堪えている。こんな風に遊んだことがあるのか、こいしは思い出せなかった。

「次だ次、赤兵衛と青六郎が終わったんだから太郎と次郎だ」

「次郎のが勝つよ」

「いいや太郎だ」

こいしにとつては別に誰が勝つてもいい。賭けるようなものを持っていないし、そもそも消える魂がどこに行つたつて知つたことじゃない。そう言えば、こう言つた形で消えるものが魂だつたということを思い返した。

「ん？ 姉ちゃん、誰だ」

軽く考え事をしていたら無意識に意識下に入り込んでしまつたらしく、青鬼の子供に声を掛けられた。こいしはなんでもないよと言つて足を別の方向へと向けた。他の鬼の子供は氣付く様子すらなかった。

漂つては消えて、消えてはどこからか現れてくる魂。雑に扱われて消えていく魂。それでもどこかから漂つてくる——いや、どこかからと言うのはもう分かつている。ここではない

どこかからだ。

吹き溜まりのような魂がふわりふわりと行きついた果てがここだ。この場所に安全な場所も安寧も無いのに、ろくでもない魂ばかりがふわりふわりと辿り着く。やはりそれは、どこかこいしに似ていた。何も考えなかった果てがもしかしたらここの魂なのだろう。

そして、路傍の石のように誰も気に留めない。例え消滅しようとしていたものを見つけたとしても——例えば、虫が死んでいるのを見つけたとしても何も思わず通り過ぎるかのよう——魂を扱っている。

どうも、地上では人間が死ぬと葬儀を行うらしい。そうすると、こいしが食ったあの人間はそういった扱いをされないままだったのだろう。もしかしたら魂がこのへんにも一度は来ていたのかもしれない。人里から追放されたくでもない魂ならば地底にあってもおかしくはないのだろうか。

葬儀の光景を観察したことはあったけれど、こいしにはよく分からない。そもそも人が死んだからなんだというのか。ペットが死んだからと言って特に心が読めないこいしにとって

は単なる現象以上のものではない。それ以上の理由を理解しようとも思わなかったし、姉が寂しそうにしてもどうでも良いから放っておいた。

魂の心を食べられるのかと手を伸ばしてみたけれど、すり抜けるように消えた。考えてもみれば、こいしは意識下に無いら認識すらされてない。こいしの実体がないのか、この靈魂の実体が無いのかは置いておいて——少なくとも、こいしの方が存在としては扱われていない。

少なくとも、鬼の子供が靈魂決闘みたいな遊びをやっている程度には触れられるものである。けれど、こいしが触れたとしても人によっては気付かないだろうし気付かれない。先ほど鬼の子供に気付かれたのは、本当にたまたま——意識下に無意識に落ちていたからで、普段のこいしならばきつと気付かれることもないだろう。

そう思うと、何かとても釈然としないものをこいしは感じた。意識ではない感情が、ふとしたことで巻き起こる。これはきつと、こいし自身も理解しているわけではない言いようのない何かどうしようもない感情だ。

例えば巫女と遭遇して容赦なく叩かれたときのようなものでもあり、白黒の魔女と遭遇して遠慮無く逃げ場もないような弾幕で叩き落とされた時のようでもあるそれは、珍しくこいの凧に波を掻き立てた。

例えばむしゃくしゃする、とか、腹が立つ、とか、そう言った表現が適正なのかもしれない。けれど、こいしはそれが自分から切り離されていることを知っている。心なんてものをどこかに置き忘れてきているから、その言葉が腑に落ちるものではないのだ。

川の中に休んでいるように、石の上からじつと動かない霊魂が見える。何も考えないままに、こいしは小石を拾って魂に投げつけた。弾幕勝負をしたことがあるし、こういったときに狙いを特に定めずに投げつけたとしても当たるものは当たってしまう。あ、と投げた小石が霊魂とぶつかるうとした瞬間、不意に気付いた。

あの霊魂が、こいしをずっと見ていたことに。気付いていたことにこいしは気付いた。それが本当に目があつて意識や感覚があるものなのかは分からない。けれど、こいしは確かにその時あの魂がこいしに目を向けていたことに投げてから気が付いた。



これは、偶発的なものではない。それに、他の霊魂も同様のものであるという確証は間違いないだろう。けれど、あの霊魂は間違いないしをじつと感じ取っていた。

「——あ」

かあん、と高い音。霊魂を貫いてこいしの投げた小石が石に当たった。一瞬の時間もなく、霊魂は消えていく。輪廻から外れ、彷徨う先すら分からなくなった救われない魂が。それは、もしかしたらこいしだったかもしれない。それを今、何も考えずに投げた小石で貫いて消し去った。

「……ああ」

あの魂が消えた原因が誰かと言えばこいしだ。こいしは理解した。巫女に調伏されていたあの魂は消えていなかっただろうと。石を投げた後にそれを止めることなんてできるはずがないのだと。飛んだことをしてしまったと気付いたけれど、投げてしまったのだからもう後の祭りではない。途端に湧いてきた罪悪感のようなものが、湧いた一瞬後に消え去った。謝罪や賠償のようなものができるものかと考えてみて、結局何一つそんなことはできない

とすぐに思い知った。もう過ぎ去ってしまったことは取り戻せるわけがない。ただ、こいしがたまたま投げた石が当たって、その靈魂を貫いた。こいしの偶然の行動で、不幸にも靈魂は消え去った。そのままこいしは、靈魂が消えた先をじっと見つめたまま佇んでいた。自分とあの靈魂だけが世界から切り離されていたように感じたからだ。

いや、実際に靈魂はこの世界から切り離されて、こいしだけが取り残された。そのことにある種の寂しさのようなものを抱いて、そこから動くことができなかつたのだ。

自分が調伏されなかつたのはたまたまで、巫女にとってはきつとあの靈魂と同じようなものでしかなかつたのだろう。それでもこいしはたまたま生き残ってしまった。そのことについての喜びみたいなものは、やはり一瞬だけ湧いたけれどどうでも良いものだったのでこいしの無意識からは消え去った。

ただ、一つだけこいしは何となく分かつたことがあつた。生きることも死んでしまうことも、同一の事柄の表裏でしかない、ということだ。たまたま消え去ってしまったものと、たまたま生き残ってしまったもの、その違いが今のこいしだ。

あの消えた魂はどこへ行ったのだろう。少なくとも地底よりは良い場所かもしれないが、もつとろくでもない形の消滅とも言えるのかもしれない。

ほんやりとした温泉の灯りがこいしの視界に映ったけれど、どうでも良いことだった。いつものように漂うように、こいしは進んでいく。言いようのないものを抱えたままで、大切なものも何も持たないままに。

結局、こいしは暫くそこに居た。それ以上はこと語る言葉を筆者は持たない。ただ、彼女に後遺症が残ったものではないということだけは読者に伝えておく必要があると認識したので、そのことだけはお伝えして筆を置くことにする。(了)



近藤貴弥

善き道

稗田阿求の悩み事はいくつもあり、その多くは阿求自身の将来に関するものである。将来に対するぼんやりとした不安というものはなく、明日も明後日も来年も再来年も、今日と変わらない生活を続けるという確信がある。

広い屋敷で、何人もの女中に囲まれ、客人の応対をして、幻想郷縁起の編纂を続ける。

そういう生活を阿求が阿求でなくなり、次代の御阿礼の子に生まれ変わっても続けていく。何のために日々を生き、暮らしているのか明確に分かっている阿求の生は、不自由がない。不自由がない生活は良いように思えるかもしれないが、実はこの暮らしが阿求を困らせている。こういう秋の深まった日に屋敷で編纂を続けてばかりいると、困り事と向き合う時間が無意識の間にも増える。

何について困っているのかといえば、この一生がこのまま続き、終わり、また続くことである。停滞を良くないと思っている、と言い換えることができるかもしれない。秋風が庭の紅葉を揺らす音が聞こえる時など、特に思う。のどかな時に、阿求はこの気持ちと度々対面する。

他者に受け明ければ、贅沢な悩みと小言を返されそうで、阿求はずっと胸の内に閉まっている。多くの人間は何のために生を授かり、日々暮らしているのか分からない。この世を去る間に思い返し、自身が何のためにこの世に生を授かり、今の今まで生きてきたのか知れるのは稀だ。多くの人間は、自らの生が何のために存在しているのか知らずに一生を終える。もしかすれば、多くの人間は家の商いを継ぐことを考えているのかもしれない。親から子へ、子から孫へと代々、家の商いを途絶えさせないように、無自覚的でありながらも生きていくのかもしれない。

阿求のように生まれてきた意味を最初から理解し、その生を全うしている者はいない。幻想郷の人間のためにその生を絶えず繰り返す御阿礼の子だが、彼等に家や家族という感覚はない。

稗田阿求は初代御阿礼の子である阿礼の生まれ変わりであり、稗田家という家、親から子、子から孫というふうに続けられてきたものではない。そういう世襲制を採用すれば良かったのかもしれないが、御阿礼の子はそういう生き方を選ばなかった。

御阿礼の子は、幻想郷という社会の中で生きている。幻想郷という特別な社会の中に転生という仕組みやシステムを作り、生かされ続けている。社会のサイクルの中の一つに、阿礼は自身の生を嵌め込み、欠けることなく幻想郷が記録される道を選んだ。

御阿礼の子というシステムは、不安や悩みや困り事を感じることもなければ、停滞を良くないと思う心も有していない。

阿求の感じるこの停滞は、極めて個人的なものである。

つまり阿求は、自身の生にある種の退屈さを見出している。生活に刺激を欲しているともいえた。

「——出掛ける？」

阿求の前にやってきた客人である藤原妹紅が、用件も告げずにそんなことを言った。

阿求は妹紅にここへ足を運んだ理由を思い返してみたが、どこにも彼女と出掛ける理由はない。

阿求は編纂の手を止め、意外そうに提案した妹紅の顔を見つめる。



「どうしたんですか、急に？」

それが用件ですか、と続けて尋ねると、じっと見られていた妹紅は涼しい顔で首を横に振る。

「なんだか、そんな気がして」

「気、ですか？」

「面白くないことをしている顔だわ」

妹紅の視線が、阿求の顔を捉える。紅色の瞳の内には、阿求を悩ましているものの影はどこにも見当たらなかった。彼女も、御阿礼の子のように長い人生を歩んでいるのに。唯一にして最大の違いは、御阿礼の子は転生をして、阿礼の生を次の時代へと繋げているが、妹紅は老いることも死ぬこともない。長い時間の中で、妹紅は多くの悩み事を解決したのだろう。

阿求は不快げに言う。

「悩んでいるんです」

「編纂のこと？」

「違います」

「意外ね」

「……別にそんなに編纂一筋じゃありませんけど？」

「そう見えたから」

「そうでしょうか？」

「それで、悩み事って？」

「退屈です」

「……え？」

妹紅に訊き返されたように思え、阿求は今度ははっきりと答える。

「退屈です」

妹紅はわざとらしく唸り声を一つ上げて、腕を組み、何かを考えていることを阿求に伝えるように頭を上下に動かす。阿求は自身の悩み事が、妹紅にとっては随分と簡単なもののように捉えられたようで、唇を尖らせる。

「聞こえました？」

確認すると妹紅は口角をぎゅっと上げて言う。

「ええ、そりゃもう十分に。毎日お仕事で大変な御阿礼の子のお嬢様が、わがままなお姫様になったって分かるくらいには」

「……違います」

「違うの？」

「私の今の発言のどこに、そんな思いがあると思ったんでしょうか？」

妹紅は部屋の端に置かれている数々の書物に目を遣る。全て、幻想郷のことが記録されている書物である。

「これだけ仕事をして、退屈なことあるのかしら？」

「代わりますか？」

「私にそんな頭腦ないから無理よ。代わりたくてもね」

「私も代わってもらいたいですが、妹紅さんのように自由気ままに生活するのは向いてません」

「こんなに大きな家で住んでたら難しいでしょうね」

「それで一体今日はどういったご用件でしょうか？」

妹紅のペースに付き合っていると日が暮れそうに思え、阿求は客人に尋ねるべき言葉を口にした。阿求が退屈なことで、だからといって客人である妹紅の用件を聞かないことは繋がらない。妹紅の用件を聞いて、事を解決してから阿求の退屈について考えるべきだろう。幻想郷を記録することが阿求の役目であるため、妹紅の用件を聞く必要がある。

秋風が屋敷の廊下に入ったのか、障子が微かに震えた。

「妹紅さん？」

阿求が声をかけると、妹紅は思い出したかのように呟く。

「用件、ね」

「そうです」

「見回りよ」

「どこのでしょうか？」

「ここだけど？」

「里で悪さをしているなどという話はありませんが……?」

「あなたよ」

「私ですか?」

妹紅に言われたが、どの誰にも自分自身の見回りについて話されたこともなければ、話したこともない。前に妹紅が客人として訪れた際に、そういう話をしたこともない。人里や自警団の様子を報告してくれることはあるが、阿求自身のこととは話題に上がらない。阿求自身のことよりも優先して考えなければならぬことがあり、阿求も妹紅もそちらを優先して考えている。

思い返すと今日の妹紅の様子は少し普段と違うところがある。こうして話す時、妹紅はすぐに報告してくれる。何も話さず、いきなり阿求に質問を投げかけるようなことはない。自分が話すべきことを口にしてから、阿求のことを聞く。

阿求は呆れたように溜め息をついた。

「そんなに暇に見えます?」

話すべきことがない客人に時間を割けるほど、阿求は暇を享受しているわけではない。妹紅は明るく笑うと、だから言ったじゃない、と言り返す。

「出掛けるって」

「全然話が見えてきませんか？」

あなたと出掛ける用事はありませんと伝えると、妹紅は不思議そうに首を傾げる。

「そう？」

「ええ」

「息抜きはあった方が良くわ」

「今、ですか」

「今日よ、これから」

「随分と急ですね」

「そう？ 丁度良いと思わない？ 女中に聞いたら、私の他に客人はもういないみたいじゃない。どうする？」

出掛けたくないわけではない。妹紅が言ったように、息抜きが必要だと思う。そうすれば阿求の心の底にある退屈も形を変え、どこかに出て行くだろう。ただ、妹紅に全ての主導権を握られているのは、気に食わない。阿求はこの屋敷の主人であり、妹紅は客人であり、この関係の主導権を握るのは、きつと阿求であろう。

阿求のこの退屈は極めて個人的なものであり、阿求自身がどうするか決めるものである。妹紅に委ね、どうするべきか決めてもらうものではない。

阿求は微笑を零して、答える。

「それが妹紅さんの今日の用件でしたら、仕方ありませんね」

妹紅も頬に小さな笑みを浮かべてこう言った。

「ええ、今考えた用件だけど悪くないでしょう？」

「皆まで言う必要はありませんよ」

女中に伝えて来るわ、と妹紅は腰を上げる。部屋から出て行くこうとする妹紅に、阿求は一言声をかけた。

「本当の用件はありますか？」

妹紅は阿求に背を向け、部屋から出て行きながら短く答えた。

「ないわ」

阿求は妹紅の背中を追いかけるように立ち上がる。部屋にはもう阿求しかいなかった。長い黒檀の机には書物が広がっており、辛うじてまとめられた文書がある。

「良かったです、何もなくて」

阿求の言葉は、妹紅に聞こえることなく部屋の内に落ちた。阿求はそっと障子を閉めて、先を歩む妹紅を追いかけた。

もし妹紅に用件があれば、きっと屋敷の主人としてそのことに応じたと思う。阿求は自然とそう思った。

今、妹紅の後ろを追いかけている阿求は、そういうことがない一人の少女だった。

妹紅と出掛けることになったが、妹紅が言ったように急拵えである。どこへ行つて、何を



して、ということとは二人とも一切考えていない。

屋敷を出る時に、どこに行く気なんですか、と阿求が一応尋ねると、そんなことを考える余裕なかつたわ、と返された。妹紅から考える余裕を奪つた要因の一人でもある阿求は、声を荒らげることなく、きゅつと唇を結ぶことしかできない。

外は秋が深まり、日の暮れが近づきつつあるためか辺り一面を茜色に染め抜いていた。人里に流れる風は川を通り、冷たい。阿求は薄い羽織の前を合わせ、襟巻きをぐるぐると巻く。妹紅は頬に冷たい風を浴びると楽しげに笑う。

「冷えるわね」

「使います?」

阿求は自分の首に巻き直した襟巻きを指さす。妹紅はひらひらと手を振って、断る。体温の調整には慣れているの、と言いたそうに。

人里は夜が近づくとそつと静かになる傾向が見られるが、里の一角ではいよいよ、といった調子で灯りが灯るところがある。提灯を吊るした通りはこの酒類を扱っている。妹紅は

「そのどの店にも足を運ぶことなく、通りを歩く。屋台も出ているようで、暖簾の向こうから声がする。」

通りを抜けると二階建ての長屋が連なり、壁や戸の向こうから賑やかな声が聞こえてくる。妹紅はまた一本の通りに入る。暖簾を外した店もあれば、まだ商いを続けている甘味処もある。

妹紅はまだ暖簾を降ろしていない甘味処へと入った。

「息抜きに甘い物が必須よ」

阿求はいくつか言いたいことがあったが、甘い物が食べられるとなると腹の虫が鳴るような気配を覚える。少し緩んだ頬を心持ち持ち上げて賛同した。

店の中は疎らに人がいて、甘味と茶に舌鼓を打つ者もいれば、何か話している者達もいれば、貸本屋で借りた本を読む者の姿もあった。

妹紅と阿求はおはぎと茶を味わうことにした。甘いものは、阿求の凝り固まった頭に痺れるように広がり、安らかな気持ちと幸せを胸に芽生えさせる。退屈、と思っていたそれまで

の自分が、唐突にちっぽけな存在のように思えた。一方で、一つの甘い物で簡単に悩みが吹き飛んでしまう自分自身を恥じたいとも思った。

妹紅は阿求の心の内など全然見透す気がないように、茶を啜る。おはぎを食べ終えた妹紅は満足したよう短く息を吐き、穏やかに阿求の暇を肯定してみせた。

「良いと思うのよ、退屈で」

「……そうでしょうか？」

阿求より長い年月を生きるこの少女に、退屈であることを良しと言われると、良いことなのかもしれないと思うが釈然としない。

妹紅は納得していない阿求の視線から逃れるように、店の中を見渡した。夜が近くなっても明るく、誰も急いで帰ろうとしない店の中を見渡していた。

「こうして人間が夜でも普段と変わらない生活を送っている。それはきつと、あなたが書き物を通じて人間を守り続けた成果でしょうか？ 良いじゃない、たまには暇でも。誰も何も言わないわよ。平和なんだから。あなたが……あなたが……あなたが飽きることなく自らの使命だと思っ

て、編纂を続けてもたらししたものよ」

阿求は何も言えなくなつた。驚いたように口を閉ざし、妹紅がそうしたように辺りを見渡す。明かりの元で賑わう店の中を。

幻想郷縁起の編纂を続けているが、そのことについて誰かから肯定されたことも認められなことは今ではもうなかつた。

御阿礼の子の役目として捉えていただけで、幻想郷における人間と妖怪の関係を整えたり、考える場を設けさせるのは稗田の手に負えるものではなかつた。結界により、ようやく安定した、と考えているし、歴史がそう証明している。

御阿礼の子が編纂を続けていた書物は、最も肝心な時に、人間と妖怪の関係、境界を作る時に役に立たなかつたと残酷な現実を突きつけられる。それでも、その書の編纂は、御阿礼の子に必要なものである。もう多くの者には役に立つか分からない書物……。

長い沈黙の後、阿求は先程とは全然違う幸せに胸を震わせていた。

「役立っているんですね」

「ええ、あなたが思っているよりも、ずっと」

日が沈み、夜の闇が人里を覆うようになっても、店の中は明るいままであった。〈了〉

## 後書き

この度は、「東方白樺派合同」を手を取っていただき、まことにありがとうございます。  
モチーフ作品元は左記の通りです。

こうず 正義派（志賀直哉）

植物図鑑 和紙の美（柳宗悦）

ひととせ 或る女（有島武郎）

藍もどき 小僧の神様（志賀直哉）

改 流行感冒（志賀直哉）

深紅香奈 お目出たき人（武者小路実篤）

無知万歳（武者小路実篤）

久我暁 三人の弟子（里見弴）

高坂流 城の崎にて（志賀直哉）

近藤貴弥 白樺派の主義・主張

私事に紙幅を割いてしまい恐縮ですが、書いた方が良いなと思い、書きます。出藍文庫として、二〇一四年から二次創作で同人活動を行ってきましたが本合同誌をもちまして、同人活動は終了します。別サークルでの活動や名義を変えての活動もありません。

休止という表現を用いないのは、いつかまた合同誌を主催したり、個人誌を頒布することがあるからかもしれないという明るい可能性を皆様に懐かせるのが大変心苦しいためです。

活動終了の理由ですが、一次創作の同人活動や新人賞にむけて今よりも一層頑張りたいためです。

今までありがとうございました。

二〇二三年十月上旬 近藤貴弥

し が なお や せい た ん      ね ん き ね ん  
志賀直哉生誕 140 年記念  
とう ほう し ら か ぼ は ご う ど う  
東方白樺派合同

---

2023 年 11 月 12 日 初版

原作 東方 Project (上海アリス幻楽団)

印刷 ちよ古っ都製本工房

発行者 こんどう た か や      し ゆ つ ら ん ぶ ん こ  
近藤貴弥 (出藍文庫)

連絡先: stkk7.920521@gmail.com

HP: <https://strn2014.com/>

ロゴデザイン 工藤雅弘

寄稿者

こうず

植物図鑑 (園芸センター)

ひととせ (四季堂本舗)

藍もどき (東方天翔記 CPU ダービー処)

改 (AnotheR TrauM)

深紅香奈 (書棚裏の御稻荷様)

久我暁 (青猫幻想団)

高坂流 (妖精時計)

※本書の無断転載・販売・複製等を禁じます。

---